謠曲拾葉抄

三竜當海融

輪田麻人

圭

三輪

大神社者在大和国城上郡所祭之神一座素戔嗚尊御子大己貴神也　神代巻曰大国主神亦名大物主神亦号国作大己貴命亦曰葦原醜男亦八千戈神亦曰大国玉神亦曰顕国玉神云云

大己貴神之幸魂奇魂今欲何所住耶對曰吾欲往於日本国之三諸山故即営宮彼所使就而居此大三輪之神也矣

旧事本紀曰大己貴神駕天羽車飛於虚空徧求妻時下千節渡縣潅通太陶祇之女活玉依姫其往来非人之所知其女初孕父母怪問曰誰人来乎女答

曰有神人自屋上來共雙栝於是欲顯見之著針于
苧玉巻懸于神人裳裾其絲見之明旦從往尋見出
自鍼孔経節渡山入吉野山留於三諸山其所絡
之絲三丸猶遺故号曰三輪山矣
江談云玄賓去洛陽赴他国間道來舎女人脱衣矣
乞女人得之詠和哥
巳上此歌深い江渓の紅葉ふりつもりて踏みわけ
童蒙抄云昔伊勢國の人深く契りをかはしつゝ
かくと云もをろかなる者の為にしく物うし。形黒く長るし。

用いてまろ星のごとし。猟師是を村あそびに
怪異ぬとて神のぬ。夜ひく血のおひつゝく
為もるよ。をさる山中おかしきをとて妻ぬ
嫁ぬ。其用ふ入。其嫁の前に神女ぬく。此猟
師をそひそて云。汝が村ぬうるものぬ。此嫁ぬ
給ぬ鬼し。我に此鬼よとそれく毎夜嫁よをめる。
汝此鬼を殺へしと。猟師等を集め嫁よつく。
火をそつけく焼ころし。そ後此神女を異し
てあよ神り。おそ給ぬうし。そ後此男白比丘尼
もみもうせぬ。男神りて泊瀬し。もの祟迫。

此女常小居さうろう。三梅のふ
本校さそろ門こ弁当身さうろう。そようて大
和もよ名もりく三梅の神の社まあり。此女ふ
あふへさようを称うろ行ふ。其社の御戸(ミト)開宇
さそてこそ行ふ。児も同じくこそ行ふん。そ
うう三梅の事を。伊勢のあふさうの歌のふ人あ
あふと。文暑　詞林采葉集ふ
古今集ふ
「恵(メ)くいとあふひさまも我宿の三梅のふ本校さそろ門
此女ふ三梅明神。往古大明神ふ拳(ムスヒツリ)行ふ
往ふまい。三梅ハ女神ふ名(ナ)ふ
ふう。紙(カミ)託(タク)拾遺抄ふ往古明神の御託宣ふて
「往古のふしもでさんふ
此女ふ往古明神女神ふ
ふ。往古往古明神の内。十社神功皇后
ふくおりこそ。又(マタ)玉(タマ)依姫(ヨリヒメ)ふこそ。中暑
ふ。うの妻(ヨメ)行ひろふこそ。
三梅明神の女神男体の神ふ
伊勢ふ女神ふふの歌ふ
男女をうこそ行ひろふ。
服(ハラ)小袖のふまふ。
芳玉(タマキ)ふ。ふろけ御ふろふまい。三梅とひふ暑(下)

奥義抄云此三輪の社もろくて。ちぶの日ハ。
茅の輪をこつ作りてくゝる。其のよふ事くゝるをも
ちゐるこ。社のおいせめをあやしくゝ。里の者
共集りて造さうそうきい。烏百千出ゐゝ
鳴う。そこらのものをいあつめ。その事をいあくゝ
て曲をさうふさうふ。そゝね神のちうひてもり
て造〳〵〳〵そゝ

旧事本紀云上皇初代時大已貴大神問吾魂大国
魂大神乃神欲住何処時魂神荅曰吾欲住山
跡国三諸岡故造祠於山脉令祠之至後吾亦遣宮
於山麓而祠矣

詞林采葉云伊勢のいつきの歌乃様師のよ
なうろ時い。社司ふ田ふ毎ともふおりして。
陪ト尸をひ〳〵さくゝ乃ふ
なゝもゝべう〳〵
私云日本紀。童蒙抄等の説を乃ふ。
上古よい社いうと乃ふ
▲云い和乃三輪乃山ゐよ
ふくひ　三輪神社い乃
物部のよふひきゝ乃枝多し。茶酒の
人云ゆくゝ物を。ゐい大きふの義よゝ。
云旨同書云ゝゐ乃ふ

家ニ。之法ニ。祢宜ニ。祢
奇備ニ。なしまゐる。皆此ニ乃名ニ。万葉よ
尺くさゝ
玄賓ハ弓削氏ニ。河内ニの人也。興福寺の宣教
ニまなびて得唯識。潜ニ伯州ニの小家ニ
ニ静ニ住ふ。村民極武帝不例ニよりて。詔
もとうひく勅ニ。法力を以てこれ癒よ。
愈る。又ニふゆり法ニ。大同帝詔して輦
下ニ引返し。僧官の勅をとゞめ
ずく有しよりく。備中の湯ニ幸ニ過
玄ニ弘仁帝ニ。其ノ行跡を尚ぐ。詔問ニ
不絶。毎年布を給ひき。玄賓ハ。
仁九年六月ニ寂を。年八十餘 釈書 文略
長明發ニ集云むうち
くり。ニもる寺のやんごとなき智者ニ
ど。世をいとふ深くして更ニ寺のなし
りをこのむと。三輪河のかりそめ
なるいほりをむすびて。ひとりすみ
なるくさゝ
江談云弘仁五年玄賓任律師ニ辞退之歌ニ
三輪川の清き流を不汲ても我の神いさめよ
此哥古事談ニ。ハ僧ニ辞退の時。大僧ニ

又云辞大僧都ニ乞ふ
「引ハツニ」ほいとある添ふる
已上　和尓ハ田村ふ添ふを。泔門同上
▲檜(ヒキ)あうのふ　檜(ヒハラ)ハ乃奥を多称ん
并筒ふ記を
▲三輪のふおひまつ檜ハ乃奥を多称ん
明神ニ備ふの榊ふ
なとゝ。按ニいニ輪ふ乃ふ乃奥をいふ。又
ふ添ふ玄実備記
添ふ
新拾○うらしまる後尾をぬ揃うる檜ハ葉をまつのふけふ津守国夏

老少不定　楊貴妃ふ泔を
まるまるまくて続ようこと多月をニ輪の霊ふ
白氏文集曰事々並載身也老酔卿不ル去欲ニ何帰一矣
東関紀行云齢ハ石とをのまふ近つきて、髪乃
裏潮ふよしとしてくた。まをまるまくして続よ
ゆふくまをのふ秋のまるまくふ水ぶを　下巻
○俗ふ秋のまるまくふ水ぶを
▲俗都　新改ふ泔を
▲山頭夜戴孤輪月洞口朝吐一片雲
此詩ハ在ニ百聯抄解一ふ
とひ。洞口とまるまようまく。まをまくまくまけ

くう。孤輪として月よつうふしてあつて
▲山田の僧紀の勇社郷一名秋そめまた山名田
續古今集雜上僧都玄賓の歌。
詞書云備中玉湯に行こしの道に。續古今栄雅扶云玄賓僧都世を
此の海よい點(カナ)くく。山田をりるさを
もるもとを。古今
通(カヨ)きてく。備中玉よりてをりる。名よ田をもる
く。民なふそうひ
ものと。そうづくいかごし(カゴ)をそうづ
御傘(サン)云古今おるを
ふくもへを。板おくく

そもあるこ。いかしこ
るそうくく續(ヨミ)ひ
そうづいかくうく
おのをてそ称うを。
添水(そうづ)しゃうく
山影(サンエイ)入門(テニヲハ)推不出月光鉾(ディテフ)地掃還生(二八六尼一女ス)
此の詩も百聯抄解よりの。侍のん咽ふまうう
看変長(テウヘンヨウ)ふしく老生(ラウセイ)しく困るる居
此の句百聯抄解ふを見てを。ひまの借で逃而
可考(ベシカンガ)い老人のふまを押ひうるるをふと
栗のあそ戸を押ひうるるをふと

三年哥合
○人とう宿乃あこを押あけてうち秋の秋をこそうん有家

かくしも秋をうしなひけるを。かうしもいうくいかく
檜をつむしこそうけうのごくくるてこ斯(カク)のこと。一もいと(テニハ)ふしき
うしこそこい切檜(キリヒヲ)しこそうを檜い摘(ツム)みこそうてを
こそうしこそ秋なり。一抜こそうもしこそこい
来(キヌ)もし。君(キミ)しこそ義しこそ。たの字を置してう。
こそうしの志の字ふく句をこそうし。君い
給ふを指くこそ
下樋(シタヒ)の水音も苔(コケ)ふ
○宿むをぶむの下樋もかうろを已しこそうの秋ふこそ

正人 杜の柳ふ沼を
其上我宿い三輪のこそ志くいこい深こそ花
古今集雑下。読もこそ。よみ人もこそ
我宿い三輪のこそ志くいこい深こそ秋こそ門
油中秋云新撰よい志のこそ
三輪の杵のこそ
其ゆもこそ
こそこそ
杵いもこそうもなうこそ秋村中立こそ

○我家の私いもの[illegible]
此歌い今昔物語廿四云太江匡衡稲荷の称冝が
娘をもらひ[illegible]しめひろめ同妻の赤染が
許へしばしばおとづれ[illegible]赤染よみ
みく稲荷の社司法師うかゝひ集よい社司法師うかゝひ
[illegible]ゝ[illegible]云々 寄ゝ是い衣の妻よ今色
これの物の衣 これの物の衣 衣の妻よ今色
文字ふくもそもろ[illegible]
ふもそもろ[illegible]長るゝ[illegible]
この物い清く浄きそで衣ゝ[illegible]

世傳此歌い三物明神の御神徳と云ふ。沙汰よい
得ゝとゝいりゝ。ゝゝとゝ。ゝゝとゝ
おりふるゝゝ。

傳教釈云天地開初三輪神現三輪者身口意三業
也 心正則三業自正所謂三輪清浄也矣

或云此歌を三輪唱和の偈也。又いこ物空寂の布
施れゝ。この物空寂ゝいこを
この物ゝゝ。空寂ゝいこ施者受者施物共ゝこを
ゝふもいりを。云ゝゝゝ処を空寂ゝゝ云々
此ゝゝゝ

▲千早振神も乙女の有男よ人の値遇よりぞ時を
　えも明神の沖津縁とりて。遥る昔めくし。
　千早振い因村小浜を。値遇い盛久よ浜を
▲飛を助くだひ給へ
　今故もさるもの。えもいえ童子拙よ神女冕よと
　もまくる事柔。塚の中ふをめうとりる。此抗
　よ修くうく修ら為へし。よ小記を
▲えいい妙成神女の　此妙成しい神女の御し。えい
　神道之女加持経もえいり。或い天元神変神妙。
　地元神通神妙。人元神力神妙。とえる。此当の
　よ修くう妙成神女へし。

九

名法要集云神道有三種一者本迹縁起神道某宮
某社化現降臨勧請以来就縁起之由緒撮一社之
秘伝以口決之相兼二者両部習合神道以胎金両
界習内外二宮以諸尊合諸神三者元本宗源神道
元者明陰陽不測之元々本者明一念未生之本々
宗万法帰一源諸縁開基吾国開闢以来唯一神道
是也矣

▲女姿とえ悩の神　えい悩の神い。大已尭。令ふく。
　男体ふまた。女体よおのずまさ色彩よこと。
　成生の気小ふもうく妙为化し。女体
　あうえまた修ふしし。えい悩の体を女体男体と

云ふ。古来より実名を
さゝせ玉ふ事ハ門と
そうしよ女体と称
▲ちゝや掛巻ハかけ
神変不可思議大和魂又ハ練衣布ふくもも
ゆふ。又巫の事
他を。一祝云ちゝ
ゐよゝし。公戸の
表一くに服をちゝや
掛巻ハ貴士を懿よ
祝ふ祝言をよむ没人と。
令義解云祝者為祭主賛辞者也国司於神戸中簡
定郎申大政官若死亡人者遍取庶人一也
▲烏帽子ハ卒都婆小町
▲中ゆを比売語ハ人
和尓ふ磯城とそ名
長谷へゆけハ。恩寺村あり。そゆよ
そもさ語の紀と。秋明天皇の記念碑の宮
の旧迹と。古ふ小磯
実ゆ大和国をいふ
とそ也。和名を

四神の神源。又タ古今集の序を引く。仮名序。和歌ハ神世の風俗。神力をもつて人の心を感ぜしめ給ふ。御代ヤツリ敗式目云右神者依テ人之敬ヲ増威ヲ矣

五濁の塵ハ因縁よりおこる。夫婦の着ケリ

天和四年久しく男女おほく。寿命ながくして。ながらへ。

袖中抄云昔し大和国に。ニ。ありける人。

あふことも。

なうらみそ。いかにその恨く寿命の中なるべき。

いかでその形カタチを見るまじき。恨るまじき。男

うらもなくしてやみぬる。但し我カ歌を

見ざらん。ことわらば。罪ゐんぐわいあるべきにあらず。

るるうらみをかこつまじきにはあらねど。

その形見よからん。

いくい。志うありさまを。

おもん。ひとうひとうを。

つしうのけて見

ざうありてこれを。おどろきやひく。ふるを

おかびくのさぬ。その歌又タ多く。見んを

て。おくろさぬ一ひと。物ふること。我も又タ

そこを流ル多ク。

く。ふうく別をさよふんをこひ給ふ

三輪

…ゝうんるをとひく。芳うさき
…のつめするをとをそしくと。そのとをふそを
…つけく。そのそうやを持衣のまうよさしつ。
…衣あけめをいそのをうをまるべくまく玖乃
…乃をい。之梅の秋乃乃かくの内かいまう。
…その芳う乃秋を。ことげのそうくまで。之梅
…乃をていそことをいつうト云云
私云ふい日本紀景(スヂ)祢天皇(ジン)巻の倭迹(ヤマトトヒ)
…姫(トヂノミコト)命(ノ)のまう能おれ(ニ)そう景(スヂ)くヲ
八千代をこめ…玉桂うつぬ色を都そるふ
八千代桂のまう秋梅よ汲を

▲有夜乃暗(ムツコト)淳小　迩材集云むつこいもつほ

指南 ○玉ふ代ハ玉ふ玉ふの略ニて時なうこ八の世ことあそうふ桂ふ
水日集 ○玉桂うつぬ色ふ玉ふてふ玉ふ玉ふ
さこ。夜ふと
吟ふを
○むつことをうふの略ニて

▲うこと玉乃うふまでふ八の世乃多のふいまもや
うでおた。むで玉ふ桂そぬい
うこもの秋た。めて玉たこと。古ふ景ふ
つけそう。烏玉(ヌバタマ)。黒日(ヒ)玉。野日(ヒ)干とも。
万葉仮名抄云めて玉たこうい。
秋(アキ)をこと。うこ玉とこいふまてこそ秋

思ふ色ありといふとも。中略
爲玉先思玉先玉。めを玉先和
ふるハ此ん。此ヤカン干ふ
まめるハ。狐キツネハ百歳を
ふるし。百年をふるめをハ甚ハ俄ニハ妖怪の女と化
ぐ方ふうそて狐ぐべし。狐ふを転ハ武ふ
ハ髪をむもふ玉ふ。夜をハめをふ玉ふ。
ふをふめるふをふいふ。
下略

▲宝ふ色ハふうふのり
羽東師ハ杜ハ心坂浪のめ
宝ハ色ふりうふそふ泥河ふくつふう
▲狂ハる狭。流ふハ安達ふ系。小ふ老ハ二人都ふ渡ス
▲むふやもふ乃をふふさふふの糸
ふうふりふ小　雄雌之所の円遠玉男の
神を宝ふつけるを玉ふ文ふそのふ
ふつけくよふふ。ハ玉ふ乃
ハ合と。又ふさふ
うふ蜘ふ関寺ふ
茶師寺公義集ふ偽ふ正宗縁ふりふ
ふよふふ祈ふ神祇ハ祝

へ奉る神をおろぎ祭る状のくだぐだしきまでに
▲又いにしへ乃ち初源（カハラ）一神を出さんとて八百万
の神遊（アソビ）をもて神楽の始めある
宗我鳴（ソガノミナト）のまりぎ妾状（ヤナキナレ）とく天照太神
天石窟（アマノイハヤ）より出（イデ）まして高天原（タカマノハラ）
万の神々ら趁（ウレ）ひまつりまつるを。神屋根（カミヤネ）命。太玉命。思兼（オモヒカネ）命。儀（ノリ）田
彦（タチカラヲ）命。力雄（チカラヲ）命。おのくのもろ〳〵をめぐらし
給ふ。天（アメ）細目（ウズメ）命に真榊（サカキ）の上枝に八咫鏡（ヤタノカガミ）
為（スガ）手繦（タスキ）かけ。笹（ササ）の葉を手草（タグサ）に持（モチ）
澤之（ニキ）男（ヲコヲ）石窟の前に。桶（ウケ）を伏（フセ）
又庭燎（ニハビ）をたき。まろ
鳴鳥（カケトリ）を集（ツド）めくらなど
来（キ）の御（ミ）ありし 日本紀及古語拾遺
●うらゝの春（ハル）
●新治（ニヒハリ）筑波（ツクバ）を過（スギ）ていくよかね
▲三（ミ）の男（ヲ）戸（ド）をいつきまつりて
世〳〵をやすらけく
神代巻云天照太神入（イリマシニノ）天石窟（アマノイハヤニ）閉（サシ）磐戸（イハト）而幽（コモリ）居（マシニキ）故六
合（クニ）之内常闇（トコヤミ）而不知晝夜（ヒルヨルノ）之相代（アヒカハルヲ）于時八十万神會
●當（アタ）るふ天無（アメナ）神を祈（ノミ）て月日（ツキヒ）を待（マツ）小鯖（コサバ）
橘仲遠

天の忍戸ハ天よ
の義し　伊勢外宮の板乃ごとし。る今
る作ごと也。日鏡ごとし。此ノ如き石窟乃
る今の忍屋しく名つく。元長神紙百首註云豊受の
しひるゝハせう　元長神紙百首
玄の陣営乃ごとをる処ごとく云。又る今ごと
加利依加ノ義也ヲ云　叔比ノ忍屋ハ伊勢津
度の板乃ごとしごと。

●元長神紙百首
●今ノ度の忍屋を始ごと多し　倭姫世記云天
此ノ石窟よつさ
日別食。伊勢多賀作ごと造石宅ヲ注乃ごとヲ云

石窟本縁記云高庫ノ蔵者名曰天小宮亦名天磐座
是也云云　神宮雑記云春日戸高座神伊勢津彦
神等石窟也云云　今案初め伊勢津彦此ノ忍屋
を。天日別ノ命乃ごとくごと云ふ
猶ほ深ふ沢ハせう。物るよ此ノ板を作ふ天の忍
戸ごとくひ。る天ガ命乃ごとくごと云ふ。其ノ個ごとるさふ
右の石窟本縁乃ごとく天の忍戸ごとを
●元長百首　来の世ふ天の日鏡乃ごとくごとの板ごとをさ和幣ふ
日、神盤屋よ義ハ此時。依神行くの神乃ごとし。
日鏡ノ神始乃ごとく和幣を作り祭ごと。此レ乃ごとく
よ作ごと。天の忍戸ふ表し。或ハ神ふの縁をて。

此ヲ日鼓ト名ケタルナラン

▲神樂ヲ奏シ奉ルニ

文選銑注曰奏者作樂之物号也

弘決云奏者為也九為樂音皆称為奏ト矣

▲天照大神ヲ祈ル

思邦百首秋云天照時。思ヒの命遠ク海ヲ祈ルテ。ヨロヅノ事ヲ祈ル。神ノ子カ雄命ヲ天ノ岩戸ヨリ出シ奉ラント祈ルニ。其ノ神ノ子カ雄命ヲ天ノ岩戸ヨリ出シ奉ラント祈ルニ。其ノ神ハ雄命ヲ天ノ岩戸ヨリ出シ奉ラント祈ルニ。其ノ神ハ

もろくこゑごゑさわぐ。大のこや神の命。猿田彦ノ

もあの命奉うるて祈ふ。おのもおのかたのし

そぐ祈ふ。岩戸ひこをやぶりて

のはをおひ。しりへもろこを

なりもを祈へ。後へもろこ

しいた縄のはしめ

「思ひ金一芝の新乃うつねやもろくこゑの声あん

▲又常宮乃雲晴ク日月之光ヒトシクヤケハ

久堅の天乃岩戸のこの山の榊乃風新ク吹光

而ヒトシク神の徳多のうへ乃

旧事神祇本紀云此時天光宝光相合視乎羣神面
新白珍素仍宣面白兵　古語拾遺云當此時上天
初晴衆俱相見面皆明白伸手歌舞相與称曰阿波
礼言天晴也　阿那於茂志呂古語事甚功皆称阿那已上
言歓面明白也

◆ちくハ伊勢と云ふ所の神一社分分のもの
と云ふ所の神を女神といひ又天照を神ハ法神
かと云ふ名を豊岡姫共号と。此等の義小
俗く一一神分分と云ふ。尤。太已貴神ハ天照太神
の甥と。浮屠の説ふ三世の仏仏の教迦一仏乃
分分と云ふことくく。天照を神ハ地神宗初
の神と。法神皆々神の分分ハくハをと云ふ

◆今史紀云ふ所ハ舎人親王の撰ふ所の書乃ち
天の忌寸と云ふ人の作ふ所ハくつけ
つけふ

平安帝都記云抑大照太神天忌寸と云ふ人
まもる時の忌部氏の祖乃ち忌寸の祖と
右ハ忌部氏の祖乃ち忌寸の祖と云ふ。今小忌衣と云。
拾芥抄云石蔵王城四方有之兵　臥雲曰件録云
岩蔵在四方二南ハ以テ男山為岩蔵ト兵　勅撰名所和歌
抄云石蔵山東北ハ愛宕郡西ハ訓郡以上三箇所兵
私云小忌衣ハ畑枝の小枝の垂ふあり。東

龍田大明神社者在和州平郡郡龍田町北方号新宮　諸社根元記云大和国平郡郡龍田坐天御柱国御柱神社又云龍田比古龍田比女神社二座　神代巻云伊弉諾伊弉並尊共生大八洲国然後伊弉諾尊曰我所生之国唯有朝霧而薫満之哉乃吹撎之気化為神号曰級長戸邊命亦曰級長津彦神是風神　神祇普天圖云風神謂志那加都比古神廣瀬龍田同神也　日本紀云天武天皇治四年四月遣小紫美濃王小錦下佐伯連廣足祠風神于龍田立野

詞林采葉抄云竜田と云事古老

傳ヘ曰昔此処ヨ雷神落くわづらひを云ひ。農夫が表てまつれ。沼しも累々
なるほど。蒲の村よりうまれ農夫が田のよ小夕立
時くるなど。稲花成熟し。秋の収穫のまゝ
々。甚後此童ヨ瞑をもて小竜となりて天小昇ル
依て此ヲ化田を龍田と云ふをや。うくて布の名とし
給ふ者竜田ハ正字也。立田ハ半假字也。

▲別への説も秋津ヨ教ある法を納めん

教ある法とい世ヲ一代重教種々なるをいふ。秋
津ヨとい日本の古名豊秋津洲をいふ

日本紀云神武天皇三十一年夏四月乙酉朔天皇
登晴間岳廻見国状猶如蜻蛉之臀呫由是始有秋
津洲之名矣 おきつしまとい蜻蛉とい虫の形ヨ似
たるよりて秋津洲ともいふ

釈日本紀云西者額方也東者腹方也南北者両羽
也仍テ日本国東西長南北狭之間似彼虫形矣
（後略）

▲是ハ六十余部小経を納る事

廻国修行の僧ハ如法経を書写し納る。如法経ハ法
花経を云ふ。慈覚大師唐ヨ渡給ふ法花経を於比叡
山書始め給ふ其経を受ふく今も書くよ納るゝ。是
廻国修行の石作ゝ

六十余州十二代景行天皇御宇始分二日本一為二三十三
箇国一亦三十四代推古天皇御宇聖徳太子亦分為二
六十六箇一 太子傳下巻

▲又曰竜田越より竜田。越よりかも河を渡りて
竜田越へ私云此の内一ヶ所の内へ入る也。立石村のかみかも千
之越云云。此より東の方へ登りて。故小名つく。此の
内を云ふ安女と云ふを

▲奈良の都は玉葛よく見えたるの
▲西の大寺を余治小尺く 奈良の都西大寺を始めとして諸寺の勅願と。孝徳帝を始め
西立町小あり。孝徳天皇の天皇と号奉りしより類聚国史よりとりて實ハ
の天皇と号奉りしより。

寺を焼卒天宮先作之敏僧都此寺小住云云
作之。 拾芥抄云西大寺高野天皇天平勝宝元
年創之至天平神護元年十七年造畢 帝王編
年記云称徳天皇天平神護元年造西大寺安置七
尺金銅四天像三躰如意鑄畢今一躰至七箇度未
鑄得爰天皇立願曰依此功徳永離女身可成佛者
我手不可焼涌銅指入手之処敢不焼此時天王像
成畢天皇有夢想之告曰可奉迎云云 天皇臨期上生焼卒天給事不遠夢
告此寺以銅瓦葺之而負親早解落畢其後用土瓦也

支
○さるともゝ秋(アキ)の木葉(コノハ)の名(ナ)ゝ殊(コト)なる

▲早(ハヤ)もみつ秋(アキ)隣(ノ)や外山(トヤマ)のおもふ名(ナ)ゝ殊(コト)なる

秋隣ハ和名抄漢下、郡西大寺の小く。此邊ハ秋隣寺してゑ。
名殊(コト)ハ伊呂の用、基く。左傳ニ其(ソノ)ハ菜師如未。光仁(クワウニン)桓武(クワンム)帝の勅願所也 已上香水記(イヒ) 今去言山伏修して三室院と屬(ゾク)す
外山ハ里ハ秋葉のあく。後水尾院詠歌大概抄云秋隣の
外山の里ハ伊勢の嶽乃(ノ)ふもとあるへく。名木の楓(カエデ)を。
如(ゴト)あふとゝいふ名(ナ)ゝ殊(コト)なるさまをゝく。
なく、ハ當古山ハ足柄箱根をかふしめへし。但(タヾ)ゝさ
山乃前の小さ山をもこゝろへ。それゝ感情(カンセイ)を
くゝるゝ氣色をかみてゝ

師說

新古
○秋隣の外山の里や附(ツケ)ゝ名(ナ)ゝ殊(コト)なるのぶけよ云のかゝり

▲竜田の河よ名(ナ)ゝ殊(コト)なるかな 師

竜田の河を名(ナ)ゝ出れハ也。是(コレ)ゝ竜田
川ゝ。ゝ(ヘ)ゝ。此川ゝを名(ナ)ゝ殊(コト)なるハ
川ゝ。立(タツ)ゝ乃(ノ)ゝ山ゝ紅葉(モミヂ)ゝ多(オホ)ゝ故(ユヘ)ゝ竜田川ゝ云
いあるなり

▲立田川紅葉ふきゝれく流るめり渡らん錦中や絶(タヘ)ん

古今集及(ヒ)大和物語ニ奈良の帝の御(ミ)ゝ
古今ハ秘云文武の人丸を御供(トモ)ゝ竜田川遊覧の時
よゝ詠(ヨム)ゝ 奈良の帝ゝ文武の乃(ノ)ゝ
ゝ。古今序ニ秋乃夕。立田川ゝ流(ナカ)ゝれ紅葉(モミヂ)ゝを帝の御
見ゝ御(ミ)ゝ詠(ヨム)ゝ云ゝ此ゝ分(ワケ)ゝの(ノ)ゝ

阿古根浦口傳云此ノ谷ハ大同二年八月十二日、平城天皇
竜田川ヨリ紅葉ヲ流ルルコトヲ
て面白キ小水神ノ
それを帝ノ谷トハ
▲紀ふの谷ハ帝乃御製
川の谷と云、御製ト
御製歌ヲヨム、當流ニ
ゴ製ト云ふる
▲家隆の谷ハ竜田川紅葉ヲとづる薄氷ハ
此ノ谷ヲ生ニ品の中小入、谷ノ
谷ノ〳〵、つゝゞび氷のくゞけゝ中々絶ぬ

家隆卿、従二位大納言藤原、号ス二壬生一二位宮内卿一冊、
信通卿、女也、新古今の撰者五人の内ゝ、寂蓮の聟ゝ、
百練抄云、承元三年四月九日庚寅今日従二位藤
原家隆卿薨、和哥仙也、臨終正念年八十ト云

▲竜田川錦かく神代ハ
古今集冬の部の巻ノ終、歌ハ
業雅抄云かゝる月の時分
田川ハ錦をありかゝるとゝく、竜
万葉仙覚抄云此ハ谷の文字、ハありて、
大伴、家持ノ谷ゝ〳〵十ロ抄ハ延喜の作ゝ
又古今実枝抄ハ貞観天皇の作ゝとゝ

▲あやうさい薄氷を踏むことをそれつつしむをさとしてそのわざわいをまぬかれうその
詩経小旻篇曰不敢暴虎戦々兢々如臨深淵如履薄氷不敢馮河人知其一莫知其他ヲ兵

▲曇い覗ゆくひ　神巫たち説文曰巫祝以舞降神也兵
周礼曰男巫掌ル二レ巫ト女巫一レ曰レ覡。又曰司巫掌ル二レ群巫之政令一レ若
国大旱則ハ師ル二レ巫ヲ一而舞雩スト兵

▲宮めぐりさせそれ　純の中小右遶三匝右繞七
匝として仏家仏を礼する儀式小或ハ三返或ハ七返。仏を
右にめぐるなり。今天台宗等の行道をいう。或ハ
小神社宮めぐりをするなり。仏家より起るところ。紀せり

百練抄云建長元年十月廿二日巳未春日社御宮
廻也上皇御束帯ト矣
○深玄集云宮のめぐりをする河面も月さしむかふさふハ
雲也

▲哀深月　哀月の異名也
○仮名文字発明云哀れとも悲しくも墨初ん

▲富士三嶋の明神の神木ハ杉なり三嶋小社を

▲高位の紀をふかくおがめよう紀をおがめせい
立田姫ハ秋を掌る神なり故ふかくそう。奥ふかく記を

又或説云竜田明神の御神ハ一ツ葛の紀をふの也ようく

▲和光同塵ハ結縁の始めハ相成道ハ利物の終り
止観第六曰和光同塵結縁之始メ八相成道ハ以テ論ニ其ノ

終ヲ矣ハ　決云和光下釈ニ現身ヲ也同ニ四ノ住塵処々ニ結縁ヲ
作ス浄土ニ因為ニ利物ノ之始ト衆生機熟ス八相成道見身閑ヲ
法終至ニ實益ニ矣ハ

和光同塵とハ佛の光を和けく塵ふるを結緣
のはしをいふ。終ふ八相成道のふ事くの難よ淡
ふるを利物乃終ふるをいふ。利物ハ利益ふ。八相成道のふ事くの難よ淡
老子経曰和ニ其ノ光ヲ同ニ其ノ塵ヲ矣ハ此意ハ我カ智恵の光を
隠しくふ凡云ヲ和光世ふ波ひ塵俗の中ふ混ごくふ時を
あるを同塵とふ。止観の文の意といおしっかりて

▲下紀ふ　紀ふ狩ふ少ふて

▲塵ふ光ふる神ふふる和光の新乃色ふて

神書紙云明ニ和光同塵之神化故開ニ一切利物之本
基ニ矣ハ
垢ヲ
○教なるぬる心も捨を恐ふそを塵ふ光ふるふれ

▲此度い辞反あぬ　旧抄ふ俗ふ
古
○ひ反ハ
○ふそハ
○ふれわくそふ
○ふ
○ふ

神さびい峰通ふ法て、名ふおふい
▲我いやましい此神の竜田姫いわまこう
もふる秋のわまふよ。立田姫ハ
まろう　神社考云級長戸辺ハ者女ノ神ニ而級長津彦ハ
者男神也故ニ今ニ名ヲ曰ヲ龍田姫ト是也矣ハ　峨江介楚云矣ハ
依ニ深山ノ神ふるふおふう。さふふの新の色ふよふて

澤の神といひ。佐保姫秩父の神なども竜田山乃神なるべくと。
記傳を依て定めつ。小祠を澤の神と云。竜田姫龍田小祠の
名也と云。童蒙抄云まつかさどる神をさ斗姫と云。
箕つくさどる神をほくひめと云。秋つかさどる神を立田
姫と云。秋つかさどる神をつく姫と云云
万葉集奉の歌に。今小立田姫をよめる
「ももさかり七日かほどに立田姫手向をせんや
佐保姫はまだ春なれば。まだ紅葉なければ云云。
さかりと云いわれなし云云。故小祠を澤の神と云。
俗小社あるをもて云をもて云云。
彼和訣世俗同ニ云ノ

神祇部の神名をさ斗志るす処 此さかきとる事わをさきしるすもの也。さて姫いまそかりて。おほさまわ通りて

▲神に祈礼を受給ふ。

論語八佾篇朱子註ニ曰神不享非礼ヲ矣
性理字義曰神不歆非礼ヲ不祀非族矣 南秋江鬼神論曰神不享非礼ヲ也鬼神是理非其理ニ而祭之必無得享之理矣

▲和光同塵かのつらゝえもおその玉垣 おけとい丹塗し。
玉いや榊の御心。或ハ榊ハ神籬也。垣ハ繞也。
めぐりを後ろし 満皆同しるし。宮殿の

抱(イダ)き、おくるゝをあけのむ姫いちひ時〳〵さゝ給ふの神

▲我(ワレ)初(ハジメ)もろこのうら　神代(カミヨ)を守(モリ)乃れ子(ミホコ)を寄護(ヨサシマモ)〳〵

▲神代を守乃れ子を寄護〳〵

　れ子といふ天(アマ)ノ瓊(ト)子(ボコ)也、或(アル)ハ天ノ逆(サカホコ)矛(ホコ)ともいふ、

▲紅葉の色も八葉の葉歟(ハノカ)千(チ)子の〻葉さゝ成〳〵

　紅葉乃葉を子のさゝ給ふ小尺(ヲサカ)ともよめり

▲双(サハ)乃験(ケン)備(ソナ)の法味(ホウミ)ふひうれく

　験(ケン)者(シヤ)とそう。扨(サテ)ひ〳〵く苑(ヒロ)多もいのり給ふ

　備をそなへ。法味といふ仏法の味(アヂハ)ひをいふ

▲抔(タキ)滝祭(ツリ)乃神とい則(チ)南社のほとり也　抔いふ初(ハジメ)よ

　滝祭神乃神とい則(チ)南社のほとり也　抔いふ初よ

　滝祭神の滝、宮(ミヤ)川(ガハ)の落合(オチアヒ)

云(イフ)前の夢(ユメ)ふ石(イハ)紀(キ)の宮(ミヤ)ま(マヽ)ふてをり(マヽ)そ。此宮の殿(トノ)もそ

下津座(シタツイハクラ)ふそ氷神(ヒカミ)と。天の逆矛を指(サ)のこと云(イフ)ふ

あり。此滝祭の神と竜田の神と同神(オナジカミ)なり云(イフ)ふ

坂上(サカノウヘ)佛伊勢太神宮参(マヰリ)詣記云滝祭神社(タキツリノカミノヤシロ)ま(マヽ)ふ則(チ)竜宮(タツノミヤ)と云(イフ)

滑(ヌメ)ふ枕(マクラ)ふの一村(ヒトムラ)ふる小(ヲ)ふ則(チ)竜宮と云(イフ)ふ

神(カミ)ふ座(マシ)ふれ玉(タマ)ふと云(イフ)ふ

倭姫世紀云伊勢国滝祭神(タキツリノカミ)垂宮(タルノミヤ)殿在(トヾマリ)下幸底(シタツソコ)水神(ミカミ)

也一名沢女神(サハメノカミ)亦名美都波神(ミツハノカミ)矣　色葉字類抄云

滝祭神社、在太神宮北川辺(キタカハベ)但垂(タル)御殿(ミアラカ)矣　神皇正

統記云伊奘諾(イザナギ)伊奘冊(イザナミ)所探(モトム)海(ウミ)之天瓊矛者納(オサム)于滝

祭仙宮滝祭神与(ト)竜田神(タツタノカミ)曰(イハク)天(アメ)ノ御柱

国ノ御柱ト者以テ守ル二天ノ逆戈ヲ也矣
与ニ廣瀬竜田神同躰異名水気神也故ニ廣瀬竜田神
名号ス天ノ御柱国ノ御柱ト是レ天ノ逆戈守護縁也矣

▲昔レ天祖ノ詔ト未明ラ成ル治ル時代ノ民安全ニ豊ケ
天地ノ初ノ
神皇正統云天祖国常立尊伊奘諾伊奘冊ノ二神ヨ
勅シテ宣ク豊葦原千五百秋瑞穂ノ地ヲ治住ト
ラビートシテ豫チ天ノ瓊矛ヲ授ケ給フ二神此ノ矛ヲサゲ
ウク天ノ浮橋ノヨリ
ささ引ひらい滄海ノこおりを其ノ矛ノさきより
滴ル潮こうして一ノ嶋トなる是ヲ磤馭盧嶋ト云

中略大日本国昊ひろと云二神此嶋ニ降リ給ヒ
各の中ノ柱をさして八尋ノ殿を化作て住給ふ中略
又滝祭ノ神と八竜神也竜神ハ甚ノ神瓊矛を頽て地中
ふかさめぐり尺云一よい大和の竜田神ハ此滝祭と同
神ふやをや此神の形ち柱ノ如ふう天柱国柱と云所
名あり尺云中略龍田も昊ひろをさ不るをバ竜神を天柱
国柱とゝるも深き秘のなをへなり已上全文畧
私云右の正統記ハ磤馭盧嶋ハ大日本国昊山也とゝる此
昊山ハ金峯葛城峯を云と尺ゝる伊奘諾伊奘並ノ
尊天祖国常立ゝるより沼を授ク給フ天ノ瓊矛をさ
げうく滄海をうさ引給ふ彼矛のさきより

ころ鴨とある。今の今峯葛城衆曼也即チ此ノ儀ヲ
作りて仮令ば。滝祭の神と立田の神とい同じ様ぬと。その
瓊ノ尊を祈く今にも猶ノ様よとも 此儀よ天祖とい
国常立尊をそも。立田も葛城も同じ名れいと明う
なる由とをいつけくり。然るい若し室ふよ動りて天
地あさる以代のそめてとい。室ふい葛城也。葛城を祈
我室ふとそも。葛城の儀よ後を。今の今峯葛城い昔と
おのころ鴨かく天乃瓊ノ尊をホニ祈ふ奥地なれいく
そり。民安全に豊なるも偏ふ衆社乃由也といふ社
ハ立田を指くそも。かの逆戈をも儀ノ様ふ以祈ぎこは
かくつけくり

旧事陰陽本紀曰去来諾尊去来冊尊奉詔起高天
原ニ立テ於天浮橋上ニ以テ共ニ討謂之云有リ物若浮膏其中ニ
蓋有国以天元瓊ノ尊探之攫是滄海則投下其ノ矛因テ
搩探滄溟而引上之時自ノ矛末滴瀝潮塩凝化為一
嶋一名ヲ曰凝嶋嶋ノ金峯葛城山日枝山是於是ニ尊
天降其嶋ニ化竪八尋殿共住同宮ニ也 文暑

▲稍の秋乃比方の色 稍の秋ハ九月の異名之佛説ニ注ヲ

▲多麻小野ふそなるる立田川 漆や秋のとやうる。
古今集その下賀ノ哥ノ様よい紅葉ぐるの作しくを。又多
いるるらん。河去秋乃まるる色を立田川なりひや
ぞくくまるるくく。漆や秋とい九月尽の色

▲ふも動せそ海亀も波吉川うるもの陰に雅
康正二年内裏哥合
○動さゝなき大和錦のおりよく

▲松と秋の夕人もふと深てお
九ツ竜田の紅葉ふとや必ず楓の木かきつばた。若木の紅葉を
そろ〳〵。むらしぐれ立田とよめる。夕多久良共。楓乃
紅葉をよめる夕見ゝ。今ハ竜田と。秋をと。或ハ立田
川のゆふ水も。楓の木かげ〳〵。今ハ竜田と。秋をと。或ハ立田
あるのごと。立田川の上。年紀谷の奥ふ楓の木かーあ
ゝとそろ

▲今朝ふりハ立田乃楓色てこさ久良々なの時雨哉ん
此夕新古今集ふありとり共号す。綱林寒松

小内大臣の夕べと年久。一統弘長百首ふあり共そろ。逝
去可レ哀。夕のふハ秋乃紅葉を楓の花ふひろへと。夕ふハ
花乃ちあよ時雨成らんとゝ

▲秋乃ひの三室の岸やくびろん立田の川乃水れ
拾遺集物名よむろの郡とよめる。向草春夕と。夕
乃ふ明也。秋をふい竜田の郡のあ川下よあろ。其下の
村と郡ヲ秋南(ミナミ)とそろ。三室の岸(キシ)ハ秋南(ミナミ)との側ふ夕と。
或説ふ立田の西ふよの嶺(ミネ)也。夕を三室の岸(キシ)と夕ふ
云ハあ夕ろ。古今実枝抄ふ秋南(ミナミ)夕と。大和の
竜田大明神ろ南ふある成ふ秋南(カミナミ)地ふ夕とふ
撰乃井波ふ抄ふ同名ふ

▲去ぬる月いと焼小注せ。和泉式部ハ云林流小記也。神楽ハ三條小注せ附うるうるさりてい雲寺小町小注せ。

▲白和幣　白和幣。青和幣とそて神かそゞる幣帛をいふ。神代巻曰下枝懸青和幣。白和幣相与致其祈禱矣古語拾遺云令長白羽神植麻以為青和幣令津咋見神植殻木以為白和幣之矣　色葉字類抄云白丹寸手木綿也青丹寸手麻也神祭具矣　神代直指抄云青ハ木綿の色。和幣ハ麻の色。白ハ木綿の色也。まそ白ハふぐその色をいふ。和幣の菓和るをかめてい(ふ)。(幣の条)

▲謹上再拝ハ　幾遍小注せ。久方ハ羽衣ノ枕詞。夕附多ハ湯祭ノ枕詞。

▲月も落ぬる滝祭　月も落るといふ方の月をいふ。又落るハ滝祭につけうる。

▲飯ゐる砂小注せ。神風ハ伊勢宮小注せ。小忌衣ハ云々。

▲神ハいのうるせ給ひうる　神代巻を考ふるに神おはうん。がもの二柱を。神あがりとを云い。神の死ー給ふをいふ。

神代巻云伊奘諾尊神功既畢霊運當遷矣　功成

又ゐんりやくと云ハ神代巻云顕神明之際

談顕神明之憑談所云歌牟鵝可梨矣
纂疏云憑依也託也天鈿女假他神之託宣而讃
日神之至徳矣

和州當麻寺ハ二上ヶ嶽の下・尼子山の麓かあり。号ニ二上山一万法菀院禅林寺ト本堂ハ観音ニ。曼陀羅堂と云勅額あり。是ハ新曼陀羅あり。本堂の後ニ宝菀あり。中将姫の去の曼陀羅是ヲ納めり當寺ハ用明天皇第四の御子。聖徳太子の御建立ニ。其初めハ推古天皇の御宇ニ二十年。河内ノ国山田郷小御建立あり。て万法菀院と号ス。今の當麻の地いむろ役行者の家地ニ。天武天皇白鳳二年ニ當古親王の御受の告小依て今の地小移ふ。天武帝役行者の地なるを以て。行者小勅有て迦藍とな一給ふ。同十年春二月。寺觀ヲ成就セ。改禅林寺ト其後

天孚宝字年中。右大臣豊成の女。中将姫北寺ふへて
為尼一心ふ佛乃ふ誓さ我真の弥陀をおがまんと
出そとちふ。有時一人の比丘尼来り給て云ふ我ふ
為ふ弥陀如来を為しめん。須集百駄蓮茎中将尼帝へ
奏し給へ。詔しく蓮茎を為つくむ。其時化尼自折
茎取糸穿新井濯之五色燦然其後又ひとりの女来り。
問て化尼曰糸い成や。答て云成り。化女得糸於殿之西
北角織之初更よそ初て更ふ成就を。其幅一丈五尺
以藁三把浸油二舛為燭化女捧授化尼化尼与中将
尼浄土の尓相悉くそなはりぬ。中将尼大さに悦び。節を
さ竹を求て為油而後化女忽然と見えず。化尼作偈礼
圓。曰往昔迦葉説法所。佛事新起又有故感君懇志
我来此土至道場永離苦中将尼問云善哉善知識
いづくより来り給ふぞ。又さきの女人誰とかいふ。答云我へ
西方の教主之。并之の女人観音大士と言已て空を凌て
西の方ふ去給ふ。中将尼自是精後益法とも。室亀山寺
三月十九日安座会仏之後ふ。寺号額書及ひ當麻
縁起全文異巻
考るふ當麻をたいまとあやまりふ。むかいなたさとをとるへし。
麻古事紀ふ當岐麻當藝麻とあり。万葉十一よなたき
いろとふを當都心ともり。さていと尾通なれいた
いやといつり。雲玉集云中将姫。二上山ふ籠居し給ひ。

正另の称阿弥陀仏迎ふくい。
睫小入。寥くこる窓の前小。月のさえふさ〜あ〜つれて。
老尼一人残り法ふよ。あゝこおりて　中将姫
「南無阿弥陀仏をのこでぶこるあゝやうれて二上のこ
尼うへ
「二上の雲路をふさふ名を残へ小今一山　窓の月

▲教へうれさ法の門ひろる
教とい浦仏の教化こ。法の門とい仏法被行の門こ。信てひ
ろ乃とつけう。善道寺云廣開浄土門ヲ矣
新子
○教あくその法くの法の門ひろ乃ころう　後伏見院

▲昔い会仏の行者よそい我世こ
世行者ハ遊行の聖こ。大ッ経野小泰信有てそれう法ふ
を弘通一法ふこ。妻く誓願寺小紀を。行者の字義葵
と小法を。こ経野へ移小法を
選択集云念佛行者観音勢至如影与形、暫不捨離矣

▲大和路ハ田村小法を。紀の路の笑い銭通小法を
▲こやこ経峠の当田川　こやとくこれやの伊勢名う。当田川い
紀州牟婁郡当田庄当田村の東八町計小あり源栗栖川の
狭拾
○当田川流ふんの称名い称ふくめゝ　花山院
▲二上ふの藁多。　二上ふい九ヨリコ山のこ小あり。二上ガ嶽共云。又
大坂山共そう。葛城山小つゞくう。海尻へ続ふさうひこ。

小よ雄嶽しこゑあり。そのし。あ
ふなるひうめくよ二上が嶽と
支本 ○そのぺいニとふの男かおあるそうの
▲二念弥陀佛即滅無量罪兵
観経曰称佛名故於念々中除八十億劫生死之罪
兵 宝王論云一念弥陀佛即滅無量罪兵
▲八萬法聖教皆是阿弥陀たあ
此文右衣そのひつそるとくた經論小多てこれるさやし
依くありけふひしあやふそる歟。誓願寺よ法を
▲釈迦いより弥陀いそらひく 抱持小法て
▲唱ふそいれも我もなりそうむひそふ仏のあそうり
是い一遍上人のれ多し。多りかちそうしく
▲涼ス―そいれ多り 西村傳集云涼安ひくい抱ふのそ納
涼の祥ふあるひそうく 観経曰地獄猛火化為清涼風
兵 弥陀三昧経曰称南無阿弥陀佛一百遍一変大地
獄咸ニ清涼ノ地ト兵
▲濁ニゴりてもそぬ蓮の糸の五色ふいそでてそめん
○蓮糸ふの濁ふふあそぬふりてなふふ多を多しおさむく 遍語
法の恵ふ此多小蓮葉の濁りに染まりてもそめよ。ふくそよ
色よいてそりそるひし。元亨釈書云化尼自坊ノ荏原ヲ
穿新井ニ汲之五色燦然兵 蓮糸の多ふ誓願寺小法を
▲つそく起世の悪気してそ 起世

死し。毎暁寿経日我建超世願必至無上道矣
同鈔云超世流布諸佛本願是名超世矣
▲五の雲い　五障の雲ゝ梅枝小注
家
○くもりふかの雲ゝ眼てんの月をみるきもん
▲眼やゝ曇る夜の月乃影をぞふちぬのゝ切糸をやゝくしや
やくもん
五家
○弥陀教ゝ人ゝ夜夜の月をみるきもんそやけ
ゝ此かた百万ゝ遍を
▲実や教ゝ迎ゝ乃をゝくしやくもん
観経小去世不至ゝ又唯心の浄土已身の弥陀ゝ
▲来乃法万ゝ尽ゝ絵純のゝ法いもゝゝ

慈恩大師云末法万年餘経悉滅弥陀一教利物偏増
此意弥陀経及毎暁寿経小法万ゝ尽ゝ
末法万ゝの世を指いふゝ
▲又いまの世を指の戸の明ゝ
その世を待といひつゝ。毎夜のゝゝ。新左今掲抄ゝ
の戸とい梯戸なとの歟ゝ
ゝとゝ云説もゝりとゝ
▲法の場　誓願寺小注
▲又曼殊院の蓮の糸をすゝきそゝ
ゝゝあまい當麻寺曼い深殿の外ゝ
深寺いふ元寺ゝ當麻ゝ

昔天智天皇の代に其地夜ゐて光あり。見れば三つの大石あり。放(ナ)ち仏(ホトケ)の像(カタ)に刻(キザ)しに三尊の像(カタ)甚上に殿閣を作りて安置(ヲサ)め奉(マツ)る。彼蓮の糸を採(トリ)あつめ深殿の井の深寺の前よりあらはれ出(イデ)たり。

玉集
○かくろふ井にたぐへつるかな

▲色々(イロイロ)の糸(イト)の法の見仏(ケブツ)の縁(エン)をあらはし、それをいへん。此曼陀羅小極(ゴク)九品の往生(オウジヤウ)をあらはす。見仏(ケブツ)生法(シヤウホフ)は肝(キモ)端梅小浪(ナミ)をとて色々(イロイロ)掛(カケ)とといつけたり。

▲石糸(イトの)唯(タヾ)一筋(スヂ)を一心不乱(フラン)

みるなり。一心不乱(フラン)は深陀絵の文なり

▲弥陀一教 と小記を

▲叡又曼荼羅(マンダラ)の絵(エ)様(ヤウ)の色よいきりつぼも故(ユエ)ある宝樹(ホウジユ)と云(イフ)

後小角の殿の前小 本の樹(キノ)を植(ウ)く誓(チカヒ)云仏法破(ヤブ)滅(メツ)せん此樹(キノ)植(ウ)ゑんと有(アル)一が云(イヒ)ける。以来(コノカタ)教(ヲシヘ)ある事(コト)にて今の世小至てうの地ふあるとて釈出(トリ)よの也(ナリ)。此樹深寺の糸小あり。是(コレ)の糸をとりて(ヒ)くに(ヒ)ゆ(ユ)ゑ(エ)ん(ン)。糸(イト)樹(キ)なり。糸樹へ植(ウ)る糸を。宝樹へ植(ウ)る糸の七宝宝樹をとくなり

▲まま乎岡土成仏 芭蕉小沼を

▲法の潤(ウルホ)ひ種(タネ)なくく 西方要決云仰惟(アヲギオモフ)釈迦啓運(ケイウン)弘益(グヤク)有縁(ウヱン)教開(ケラ)随方(ホウ)に並露法雨(ホフウ)下界

▲ひはだ　袖中抄云考ニ本草ニ并ニ食療経等ニ全ク无ニ此ノ物ノ名ヲ一。而ルニ近代ノ人ノ多ク用ヒ来レリ。若シ是ヲ暑預ノ樹ヲ云ヘル。又ハ一ノ物ノ二ノ名アルカ。未ダ詳ニセズ。

▲あきのふくさ　あき方角ふさがりていむ方角をいふ。依テ而ノ字ヲ加ヘテ而秋ノ風ト云ヘルカ。

▲かはごろも　河内人皇四十七代ノ帝廃帝天皇ノ御時ノ人ト云ヘリ。

▲かはごろもの浄き　河内人皇十七代孝徳

天皇の政之ことを。此曼陀羅ハ観経の一部抔を委く蓮の糸にて織あらはせるものと。法花経ノ化城喩品ニ傳等有之。抔なる小三曼陀羅ありと。一ハ当麻寺の曼陀羅。今実ハ紀ヲ写ス処ト。二ハ超勝寺の曼陀羅。是レ釈清海法師の写ル化人の著ヲ処ト。傳記ハ釈ス。ハ小ノ字ノ意ヲ一ハ夢中の所見ヲ写ス処ト。三ハ普光の曼陀羅。即チ是レ夢中の所見ヲ写ス処ト。三箇の縁相各異ニシテ理ハ共ニ同一ナリ。

曼陀羅新ニ云輪圓具足ト四曼義云輪圓ト者如ニ車ノ輪ノ轂輻輞ト而後成ス一輪ノ闕ニ一物ノ一者不ニ輪ト故ニ云具足ト矣

毘盧遮那経、疏曰漫荼羅ト者名ト為ス聚集ト今ハ如来真実功徳ノ集在ニ一処ニ乃至十方世界微塵差別智印輪圓

輻湊翼輔。大日心王。使二一切衆生普門進趣一。是故說テ
爲二漫荼羅一也矣　帝王編年記云淡路廢帝諱大炊。
天武天皇孫一品舍人親王第七子也。母曰二文夫人一。
山背上総守従五位上當麻眞人女也。天平五年癸
酉誕生。天平宝字元年丁酉立爲二皇太子一。二年戊戌
八月一日庚子即位于大極殿一。御年二十六。御宇六
年。都二平城宮一。天平神護元年乙巳十月崩。御年
三十二。奉二葬淡路国三原郡一。号二淡路廢帝一矣

◆横佩（ヨコハキ）右大臣豊成（トヨナリ）ト申シ人　帝王編年記云天平神
護元年十一月廿七日右大臣従一位藤原朝臣豊
成薨。春秋六十二。淡海公嫡孫武智麿一男後人号ス二
難波大臣一。又称二横佩大臣一。此大臣女号二中將姫一。織當
麻曼陀羅時之願主也矣　左右大臣ハ融小治田

◆其ノ後ニ尼公中將姫ノ御ノ許ニ一ノ僧ノ來テ。尼公ニ
中將姫ノ當麻寺ノ實惟法師ヲ師トシテ。蓮糸ヲ
心尼ト名ヲ改。又法如尼ト号ス云々。若
クシテ出家シ雲庵ト云ヒ
ケルヲモ。ソノ後ニ會ヒ奉リシ。當麻寺ノ東乃
方小小堂アリ。尼寺ヨリ。ソレヲ雲庵ト云ヒ
死去ノ後ニ。古今著聞云。天平宝字七年六月十五日蒼
美ヲオコシテ。イソカセ。住生淨土ノ
中將姫ノ移ス給ヒ。弘法大師ノ筆法ヲ
ひしとそ

今案中將姫は豊成の女。押勝は豊成の繼し。初め押勝が
惣のちふ良丸を養ひ子に貰ひ。兄の豊成も緣戚となれく
筑紫へ移されひぬ。中將姫は豊成流人の息女とゐひ。
謀叛人押勝が姪なるまい。旁々多の憚ありて。當麻寺よ
り外を隠れ尼となるもの。世ふ傳ふ繼母の逸ゐよい此を。中
將姫の母い百敷にかくまはるさ奥女く。豊成死去の
後も。禁中ふ仕て内侍所の神璽をつとむ。續日本紀
云桓武天皇延暦元年四月尚侍藤原百能薨六十
三豊成妻ゐ

▲稱讃淨土經毎日讀誦しあひしが

稱讃淨土經は羅什三藏の譯せる阿弥陀經のみこそ
ふを唐の世ふ玄奘三藏の翻訳しあひしを稱讃淨
土經とふこ。中將姫の附ふいふぐ阿弥陀經ふ世よひ
ろふふびしく。稱讃淨土經を。世ふあるまゐれふ。

讀誦の字義い田村よ注を
是を見ひしるべく

▲終に往生の本意を遂げ

往生を期ふ着十八即十生百即千生百生
善導云念々相續畢命為期ゐ

▲一向小念佛三昧の名ふ入ふあひ

一向小念佛三昧い名号ふ紀を。一向よ
名号を唱へ或ハ淨土を観念ふれい。自ふ念よふられ
ひしくふ正念ふ入ふ三昧ふふこ。天台観經

疏云般舟経云衆生問仏何因縁得生此国弥陀仏答以修念仏三昧得生我国也矣

五會濳云然念仏三昧是真実上深妙禅門矣

▲不ハ心法の松吹風も涼しくてさるうゑをきゝの
忘水ハ在和州山辺郡又摂州及播州ニ同名あり
西材集云忘水ハ地中小き水こゝくゝゝゝゝゝ
そゝのみを云ゝゝ

王葉
○心法や雪さく岩のきり清くゝゝゝゝゝ 前参議

心耳を洗ゝ 白雲小庵

▲称名観念の床の上座禅圓月の窓の内
称名観念といふ仏を唱へ観念ハ心を静ニして仏を観ずる也

床の窓のそゝうゝ月のさゝゝ
白河法皇行殺生禁断ノ願文云 式部太輔敦光 観念窓中之心繋三明之月座禅床上眉毫八字之霜 下畧 宝物集見タリ

偖のゝくゝ此文ゝくゝゝゝゝゝ

作甚、時垂明を除き。明を發ぎ正覚を成ぜ　取意
宮小庵禅參月の窓の内につけくらふの心成(一)
三千威儀経曰坐禅有十事一當隨時謂四時也二
得安床。謂禅床也。三軟座。毛座也四囲処。謂山間樹
下也。五得善知識謂好伴也六善檀越。謂不外求也。
七善意。謂能観也。八善藥。謂伏意也。九能服藥。謂不
念万物也十得善助謂畜禅帯也矣
▲寥々とある打節ふ　説文曰寥々空虚也。廣韻曰寂
寥也或作寥又作漻矣
蝯已寥々矣　李善注引王逸楚辞曰寥廓虚静也矣

▲愈益ハ野宮ふ泊を。ふこと多なりともそれぬ中ふ心情ふ
それこそ我名ふれ参をもろべふ来ふりこと
散善義曰勧専称彼佛名化佛菩薩尋声到矣
観念法門曰時毎量壽佛観音勢至應声来現住立
空中矣

▲ふ〳〵いのれ袖もおるとうふ小ふく終ふ
恩命礼拝と云句を畧して
羅衣を云(一)

▲三月中の五日ふておもふも時正の時ふ
時正とハ春秋ふ彼岸の中日をいふ。昼夜の時均ふる
をいふ也。此時ハ日も正東ふ出ふれふと。亜細ふ入ふれふと

て日想観といふ浄土の観法也。此、杉苔を浪をるる
（夜集）のさふくにめられねねをを夜至の日一時るを見ると

▲化尼化女　化尼いふ方の沙弥尼如来。化女ハ観音菩薩と
いひとく勢至菩薩ハ化来ていなさぐるそ。菩テ云ふ曼陁
羅の教主中将法女。頭チ大勢至の化身と　口傳

▲若ふり異香薫じ音楽乃声をきく
往生要集云。金量、楽器懸処、虚空ニ不鼓自鳴皆説ク妙
法ヲ。復、如意、妙香抹香、香油量、香芳、馥遍満ニ於世界ニ矣
薫の字の義ハ　説文曰薫、煙上リ出也矣　増韻曰気蒸也
通作熏矣　王融詩云香宇荐嘉薫ヲ矣　孟郊歌曰
南風之薫兮矣

▲滅ハ此尼が登せしめる所小尼上の嵩とかや
是ハ猛の作者の文歟追而可尋ぬへし

▲老の坂　二上の嶽乃あなり小ありや雲てゐぬへし

▲奇特　説文曰奇、異也亦非常詞。特、獨也專也亦云挺
立特矣　金量壽経曰世尊住奇特法ニ矣

▲歌舞の菩薩　誓願寺小記を

▲微妙安和の潔界の元とをらん　微妙とい極楽の荘厳を云
安楽とい阿弥陀の浄土をらし。潔界といふざごゝろ世
界く。衆とい極楽の菩薩重々所のるゝ

▲本学ま如の圓融小夜せる　お学ま如ハ極楽小夜せる処を
云。宮殿とい象徴せる宮殿と。さるを満足をる処を

そろといふ　宗鏡録云真如本覚不守自性ス
性ヲ故ニ但随縁ニ転ス如ニ云法身流転ス五道ニ
或ハ有時即チ呼テ本覚為真如或ハ有時即チ呼テ真如ヲ為本
覚ト矣

▲安養　安養ハ浄土ノ名ナリ

▲法身却来の法味を含ろ　法身ハ性身ナリ安養ニ遷来テ仮ニ
安楽ヲ受小往生ヲ遂ク。従法性身ニ中ハ非ズ称浄土ニ依テ。
ヲ受ケ給フトイフヲ。法身ニ対スル故ニ却来ト云ヘリ

▲盡虚空界の荘厳ハ眼ハ雲路小かゝやき惜妙法鳴の音ハ
聽宝刹の耳にそろ　往生要集云尽ク虚空界之荘
厳、眼迷雲路ニ転妙法鳴之音声ハ満宝刹ニ矣

是ハ弥陀の浄土の荘厳ヲ賛セル文ニ。浄土ハ雲路ヲ
ヘテ遠ク。ヲ文ヨリ雲路小書ヒトル。尽ク虚空界トハ
極楽世界広大無量ヲ云。荘厳ハ極楽ノ依正ヲ。
眼雲路ヲヘテヨリ見ヒトハ。極楽ノ結縁ヲ有縁ヲ招ク眼
モ見ヘテ雲路ヲヘヌ様ニ。惑障ニ覆ハレテ
法鳴ノ音ヲ聞ヒトハ。ヲ文モヲヘヌ様ニ。惑障
無量ノ教法ヲ聞ヒテ常小従法ニ悟ヲ
弥陀ノ浄土ヘ生ヒテ。宝刹トハ宝ノ国ヲ。
響流十方ト従ヲ
▲蕭然とある暁のん　蕭然トハ物ノ成ル。盛ナル貌ヲ。
暁ノ如ク浄ナル人ノ心ニ喩ヘテ暁浄ナルヲ。仏教ヨ

後夜の法をいとなむ。暁小阿伽水をくむも。皆浄
人のわざわひをそそ

▲玄法のかなしむへきわざわひを

此意あらむ小所小紀を

▲唯心の浄土経　浄土経といふ右小紀を称讃浄土経と。唯
心の浄土ハ実盛及ひ指導なきをもうんと云教をハ称
▲ここをもやく　載をもやく

なし小男る羽と
宝法百そ
○表皇のやさあひの
▲為一切世間説此難信之法是為甚難　弥陀経曰為一切世間説此難信之法是為甚難

此文の意ハ仏の法を指く雑信の法と云。初心の思
夫其ハ心未練なるが故小雑信とそ

▲実も此法甚一ん八信をるをも称るべしと

上の文をうけつつけるなり。無量壽経曰諸佛経
道難得難聞若聞斯経信楽受持難中之難無過斯
難ニ矣

▲慈悲加祐令心不乱　称讃浄土経曰臨命終時無量
壽佛乃至来住其前慈悲加祐令心不乱ニ矣
慈悲をせのひとといふなり。なるかもの。なるかもの
悲をせのひとそなるとそ

千声も一声も誓願寺よりはじめて、鳧鐘の雲、墨田川の浪、光明遍照十方の光も、忠孝小松も、水馴棹、並木の花の夕ぐれ、さをなるなの夏の夜の

四方集云、さをなるなは機織ひのるをいふ。細川玄旨同之云、機織を織る間しばらく、其梭をとゞめ、さをなるなの夏の夜をいふ。さるほどに、なるなるさゝ竹のなるなるさゝを、玄旨のごとくさゝ竹なるなるこゝろ。万葉十二長歌よ投左乃遠離居而と続けたるなり。

○なるなるもゝひ捨てるこゝろ。其さゝをなるなの夏のうさを世よ客そへれ法の為とつゞけられいふの裸ふりひろめよう

海人

世よ大織冠物語にいふ古さゝ紙ひろ。此の縁に依て物語をかく作りたる也。又漢武帝泛海寺の縁起あもとしよう。但し泛海の妹なる宗室帝の后よを世をふしてこゝろ。事ばかりよ。葉どもよ絶たりの不比等いふ其母。海人なれよ。泛海云と号すしてくる。是依なてゐるこゝろ。世ふをつゝこゝろ。此寺縁起小委くみてこゝろ。

日本紀十三云、允恭天皇十四年秋九月天皇獲淡路嶋一時麋鹿猿猪盈于山谷忽起蝿聲衆日不獲一獣於是獲止以卜矣嶋神祟曰不得獣者是我心

也赤石海底有真珠其珠祠我志當得獣爰集処々
泉郎令探赤石海底海深不能至底唯有一海人曰
男狹磯是阿波国長邑之海人也勝諸海人是腰繋
縄入海底差頃出曰海底有大蝮其処光諸人皆曰
嶋神所請之珠有是蝮腹乎亦入探之爰男狹磯抱
大蝮浮出乃息絶死浪上既下縄測海底六十尋則
割蝮實真珠在腹中其大如桃子乃祠嶋神獲多獲
獣唯悲男狹磯入海死則作墓厚葬其墓猶今存矣
礼云世小児知小児之人繋縄千腰沉入海中良久
又唐士水母之人繋縄千腰沉入海中良久
輟畊録云廣東采珠之人繋縄千腰沉入海中良久
得珠摑其縄船上人擧出之中暑 名云烏蜑戸矣
大明一統志及蕞州志云唐の蕞州と云所の海中
水深く蜑人常小舟を縄を腰より懸く籃を携
くて海底に入て蚌を拾ひ籃に入く即縄を振
動す人急に引擧若一線の血あるくあるの乃
ち小浮ぶ蜑既に死て魚の為に喰はるゝ也
大蚌の腹小さき珠あり大なるあり貢抱
より充く小なるを出し賄く業とを 文畧

▲ゆゑで名称三月の部乃ち
三月八日久湯小屋入ゆゑで
名称といへど又月乃部とつゞく 月宮殿ハ

羽衣よ浪と

▲天地の寄り合ひを久しの天の児屋根の作濃房崎大后

とハ我ら也　あめつちいまだわかれざる時ゆ天の児屋根命ハ天帝の后也。津速産霊神孫興台産霊御子也。春日大明神第三神殿也。藤原ト部中臣等先祖也旧事本紀云天道根命。又天物梁命。這神傳宗源道兵　神代巻云日神居天石窟時中臣遠祖天児屋根命則以神祝祝之於是日神方開磐戸而出焉兵

新勅撰
●ゆふ〳〵照日のそでをとゝのへて仲遠

房崎ハ渕海公不比等子也。参議従三位氏長者。母右大臣大紫冠蘇我四雄自古女也。始著黒漆冠天武帝白鳳十一年壬午誕生聖武帝天平九年四月十七日薨。春秋五十七。葬儀准太臣同十月七日贈左大臣正一位天平宝字四年八月七日贈太政大臣是北家祖也兵　爰房渚と二十四世也

▲扨も月ごろ浦風に馴れ来つる海士の住家を今の時いと小侘しく荒れ果てたるを。房渚のいと面白く住なしたる屋敷を。

の湧いた水、那智房の湧いた南面の地名也。
房舎は往生の本尊にて
見えたり

▲京奥坂や神りと云ふ也の山　　雲月竜神ふ清水
▲ふうくと云の雲をうしろ　　此の安寧寺清水
▲三笠山今でさうくん此所の南乃海よ見うんと
新古今神祇　神院所の南乃方ふ京くさうくんふの義浪
新古今詞云云此、芳野の奥福寺の南金堂あり迄
め給ふ時、雲月のえのりて乃明神、よみ給へる
ふるとうんふ
清浦雑後集ふ南の岸にてきこ。浦陀

落ル枕音の清水し。ふ葛氏ふ南ふ
水あるこ。岡院大臣を嗣。奥福寺の南乃
岸よ南ふ雲を当てふく。不空索観音と安座
を。を嗣ふ小家ふおりませい。其家の繁栄を
めでく。今でさうくん小の義浪と給ふで。
袋草ふ小南ふ雲の澄つく義のせ、ふをふ。
明神変化こ。
▲清の出乃ふ月のお乃清浦清水の湧もふく
清出ふ南砂よ湧を。ふやといふまやの中景こ。
又、按ふよ昆湯こ云名所也。忠度よ湧を。
神代巻云伊奘諾、伊奘並尊始遘合為夫婦及生産

時に先ず渚路洲鳥脆(ナト)矣(ヲ)めらの渚路といつくしき
▲鳴門の神よ音もろ八潮(シホ)の急めぬおもおもし
・なまそ北鳴門のおさおさしくもろいとうさめぬおもおもし
北ぶしうしうりつひ修よみ人未考
鳴門八河の波よりつ。大鳴門小ふりとそ雨海へ
波ろふの。仕奉大鳴門小ふりとそ雨海へ
日本紀小海人(アマ)澳(ヲキ)人(ビト)難(ナン)波(ハ)の
と云。伊呂波字類抄ニ海士。蜑ト云。
日本紀云神功皇后自西征(ソ)九年秋九月遣吾(アベノ)竟(カネ)海
人烏麻呂(ヲマロ)出西海(ニシノウミニ)兵
庚寅朔令諸国定海人及山守部(ヤマモリノトモノヲ)兵
▲又あまをとめいふ男女乃元別いもこれひて一人さうし
おもしくあまの急ぬ髪赤くして男女共
乃ろうとめし
▲海士の刈藻(カルモ)よ絞(シボ)ふ小竹(ヲヅ)
▲こいふ須磨の浦ハ三木
郡に寺といふ波寺駅ある大久
保寺なり。皆此ところ也
▲あまの里乃海士人小(ヲ)くれ　あまの里いふ波ちの
寅卯のうしあまの里共以(モテ)見。海人が墓ありける
一天五人(アマビト)ごの切(キリ)をそ(ソ)れ(レ)ぞ(ゾ)れ(レ)。

私云房州の浦あなの里うてこい彼方さ初江
又ハ紀州寄磯紀ノ小比丘尼ノ歌ありあまの名
よう〳〵　此像ハ海士の墓うへ〳〵と云ル
女や名ハあま伊勢をのあまよ　近村集云伊勢あ
のあまハびあまと云ハ女ハ海士の墓ハ皆日
男と云ハ女ハ云伊勢
なの海士と云ハ七十女海よりまへ後ろ
なもなー〳〵　名ハありハ云ハ浦を
▲内外のハ　伊勢の外宮内宮をハ云白樂天ハ紀を
▲濱荻ハ阿漕ハ浦ハ浪を云次要及ハ云本の楊ハ云女ハ云ス

▲追海うけく流ハ芦の世をうううううれい
ハ云ハ　ハまこ小松も世後ろ流ハ云ハ
▲此浦のうハさの海士ハあくいハ　海中のあとをあくうづさ
あらをふ。うさの遊ハ云ハ　倭名抄云本朝
式云伊勢国等潜女和名加豆岐米ハ云
▲うう〳〵ハさたなよをハ云ハ新珠濱ハ云ハ
新珠濱いめう二町ハ云ハ。此ハ日本紀ハ云真珠ハ云
▲玉中小釈迦の像ハ云ハうううハ云ハ
面ハうよ像ハ云ハ面をハ云ハ不ハ肖ハ云ハ
の像ハ云ハ

盛衰記十四云壷ハ云ハ蘭ハ云ハふ良の堂舎佛閣ハ云ハ焼ハ云ハ真

福寺のお堂の丈六の釈迦三尊也。皇極天
皇の御ころ間のみ精の唐土より渡る。此
まだよろづあり。有ふる釈迦の三尊の釈
ゐの中小。大織冠の年七
ふしぎ。浪乃こすの釈迦の
海をこめぐり。大唐
帝王編年記云和銅七年
奥福寺供養本尊者釈迦三尊像也中略大織冠御
髪中令奉載銀釈迦三尊像此丈六首中奉籠也眉
間王様々倒三尊影正令写給彼不思議子細等難
尽筆端云々
神明鏡云嘉暦二年南都七大寺衆
徒確執の夏共有くて及合戦。真福寺へ押寄て
焼掃ふ。浪海のの妹。浪海のの妹。時
ふしぎ。雅宮ふ求しぞ。面光普賢の珠も此
時失ぬ。此ち焼ふる拾月氷田新庄司左衛門尉
狂よふく。勇明院の学乃ぬよくめ
出ぬ。やしぬふく。和死よ死ふ。若ふふ乃
田深小焼ざふ。此ぬ出。焼ふふそふ出等ふ
人の大浪海のの妹い唐士ふ宗皇帝の后ぬ
せふふ
浪海のの妹。ふ宗皇帝の后ぬ
ふふふ。ふふふ。ふ而波浪ふふふ。ふ宗皇帝
い唐ふ祖ふ三代ぬ
雑元年ぬ面て即位ふ。浪海とい時代ぬ

せり　高宗皇帝ハ唐第三ノ主諱ハ治字ハ為善太宗
九子母ハ為文徳皇后ト在位三十四年。壽五十六（唐書文畧）
淡海ニ不比等ハ大織冠鎌足子也。母ハ車持国子君
之女也。元明元正二帝時任右大臣養老二年任太
政大臣辞不受。同四年庚申八月三日癸未薨葬佐
保山春秋六十二。詔贈太政大臣正一位文忠ト追
又為淡海ニ卿　續日本紀云天平宝字四年八月
廃帝勅曰太政大臣藤原朝臣勲績蓋於宇宙朝賞
未九人望恒依太公故事追汲近江国十二郡封為
淡海公卿　不比等ハ史ニも。史官ノ時の
忌ニ不比等ともいわやうりこそ〳〵

◆興福寺　帝王編年記云元明天皇和銅三年右大臣
正二位藤原朝臣不比等建寺云云　同七年甲
寅興福寺供養。本尊者釈迦三尊像也云云　大織冠
於山背国宇治郡山階陶原家建立之時名山階寺
淡海ニ於奈良都建立之時改額号興福寺ト卿
拾芥抄云不比等和銅三年造山階寺是也又云一
守長者宅卿。和州寺社記云日輪山興福寺ハ名
厩坂寺ト云云　園太暦ニハ　忍辱山興福寺トも
詞林采葉云興福寺ハ淡海ニ不比等の御願。
累代拠ノ禄の氏寺也。南円堂ヲ建立せり。

海士

一千衛の觀音の像を根ざく拳跡座より埋く
其ゟ不出浄ひしゟ。雲月明神老翁と現て
小の谷泊の泳をゟ
神佐のほとりくゟ江浪。陸下
ゟ巳浄ゟ不可思議門也あれ別也。末代と雖
可有限
▲華原磬。泗濱石。面向不背の玉
或云泗原磬いまだ
面向不肖の玉泗濱石ハ。西令嘗よりゟ。此二物
いへ人のゟゟ
明徳小泰暦二年
私云よ小紀ゟ。神
面ゟ普賢の珠ゟ。此時失ぬゟ。ゟゟ

釈名曰磬罄也聲堅罄々然
周礼曰磬氏為磬
物之成是堯王臣垂句造所
兵
書禹貢曰泗濱浮磬注孔安国曰泗水中見石
可以為磬
拾遺記曰瀛洲上有青石可以為磬
其輕如鴻毛
白虎通曰磬夷則之氣象万
不聽今人聽泗濱石々々々々古人
礼云世ゟ泗濱石ハ視ことゟ。仰ゟ泗濱石ゟ
処ゟ処ゟ。右引証所の書ゟハ。泗濱の石をゟく
磬を作ゟとゟ。於
▲自大唐の乃ゟとゟ
恵晋ゟ後乃門

日本紀云天智天皇八年内大臣鎌足改中臣姓為藤原氏矣　いとうとうの子孫皆藤原氏となむ。俗に藤門四家相別るゝ

恵解らく後の門となむいつゝゝ。　伺林采玄

陛下(ヘイカ)神佑(ホカ)の降(ヒン)ゝゝ

今昔物語云不比等の俗名人あり。

所謂武智麿(ムチマロ)房前(フサキ)式部卿宇合(キアマ)左京大夫麿(カ)也。

武智麿は祖の家を乃継よ給ふ。房前は藤(トウ)門(モン)の家(カ)と名付ゝゝ。左京を承て

式部を承(ヒキ)ゝゝ。皆家ゝ有(ハン)繁栄(エイ)給ふ。文集

秋深海門の月

▲此月にて毋ゝゝぞ

▲あの時亡心ゝゝゝていゝゝ

▲ゝゝゝ　墨田川

▲雨露(ウロ)の恩(ヨン)ゝゝゝ　紀叔望(キノヨシモチ)内宴進花賦云

迎春(ヘフノヨ)乍変(スヽ)将(ニ)希雨露之恩(ヲ)　朱実物(コノミ)ゝ繁(ハ)いゝゝ

雨露君威若雷霆(ハヽレヽト)　亡心ゝゝ

▲喩(タトヘ)ハ月の庭ゝゝ

西村集云ゝゝゝゝゝ

又ゝゝゝゝ

療獨臻(リヨウノシン)註　呂延濟(カ)曰(タツ)ニ)潤療雨水也(ナリト)　文選南都賦曰潤

說文曰潢積水池也潦雨水也矣

（夫卓）○若も又々夜ふるとあるも秋の末乃月ハへさてぬるゝひるゝ

▲事もあろ〻我若乃　我カ若ともよめるもの也。我若ともよめる

（ハ）ゆうよ似ろ紫の　和顏よ浴を

▲多多のおしうの名　乃ちふ馨と猶しを為てこそ

▲細りしと領掌し　領掌いうけつゝさとり

し。領兼ル云。字彙云領統理也兼レ上令レ下謂之領矣

▲千尋の縄を勝よつけ　韻會云六尺曰尋矣

司馬法曰八尺曰尋矣

▲空いひとりよる乃浪物の波を云のさつ海浸々と

ふつく直下と乃至ル云ふるもの〻ふくもの云ふ

白氏文集第三云海漫々直下至底旁邊雲濤煙

浪最深処人傳中有三神山上下裏　漫々ハ白髪よ浴を

（後古）○云の浪物の波を云ふるもの〻ふくもの云ふ

▲八龍ハ書日竜神よ浴を。鬱ハ玉ノ井よ浴を

▲あ云や志度寺の釈音薩埵の力を合くかひ浴

て大悲の利劔を額ふく　あ云ハ実盍よ浴を。

釈音大悲ハ三井寺ふ浴を。薩埵ハ自然居士よ記ス

志度寺本堂南向号補陀落山燈盛光院行基菩薩

所開本尊十一面観音立像五尺二寸。此尊像二十

七代継躰天皇十一年江州打木谷ニ霊木流出テ到処皆為崇故諸人不敢取漸流著此浦時ニ右園子尼挙置岸上推古三十三年南海補陀洛之観音来現ズ其霊木造尊像其後行基開此山安置其像故号補陀洛　縁起略

経曰若為降伏一切魍魎鬼神者当於宝剣手ニ矣
法花普門品曰或遇悪羅刹毒龍諸鬼等念彼観音力時悉不敢害矣

◆龍宮のうつしよ死人をいめおくろくろく亜竜のうつ　按ずるよそは大海よ死尸を宿さびくろの歌

古語拾遺曰大己貴命少彦名命相与ニ天下ニ経営ス又顕ニ見蒼生ニ及ビ禽獣ニ悉ク定ニ其療ヲ一ニ為ニ人ニ民ニ者漸々ニ転深ニ為ニ鬼ニ者深難ニ得ニ底ニ為ニ禽獣ニ者鹹味ニ為ニ蟲ニ者潮不過限ニ五者有ニ種々宝蔵ニ至蔵六者大身衆生在中ニ居住ス七ニ為ニ神ニ者不宿死屍ニ八ニ為ニ人ニ者一切万流投至不増不減矣

涅槃経三十三曰譬如大海有八不思議何等為八一者漸々転深二者深難得底三者鹹味四者潮不過限五者有種々宝蔵六者大身衆生在中居住七者不宿死屍八者一切万流投至不増不減矣

華厳経二十九曰譬如大海以十相故名為大海並有十能壊何等為十一漸次深二不受死屍下略

◆光明赫奕ゝる玉をそあつて　赫奕とハ光明顕盛之皃也亦盛貌矣　説文曰赫火赤貌矣　廣韻曰赫発也明也

裴子野賦曰赫奕翼煥陰臨爵律矣

◆明ゝくゝゝゝ浦ゆ

扶桑畧記云雄畧帝時丹後国与謝郡有水江浦嶋子者釣亀水江化為女於是浦嶋子与女到常世国海神之都蓋龍宮也浦嶋子不老不死其後欲帰故里与父母時神女授与玉匣曰欲再来此者必勿開斯箱浦嶋子還郷見之知者益一人驚怪問人人答曰聞昔浦嶋子者遊海逐不返於是始知其到蓬萊而急将赴神女所向海不知在何許也浦嶋子悶然憂之忘神女言而以開玉匣紫雲忽出靉於常世国浦嶋子大悔其負俄為老翁遂死于時天長二年也従雄畧御宇至此蓋三百四十餘年矣

拾遺又乃疾八浦潟うらの茅ぬくやそうらぬく 中務

▲魂去黄壌一十三年埋骸於白沙経日月筭冥路皆々そいかをのを治よ李弁くつけるぞ未考、黄壌の二字、猶よいかとそうら、黄壌泉下、十三年忌の多治文未考、或説よ田治亡者の十三年小斎して追善をするをいふかもとそ、又一説よ胎蔵界の十三院よ喩て、十三回忌の追善をいとなむをいふとそ

▲ちさとみてうん此事のそうろうよ向ま此ちとい志俊事をそうろうよ乃字をそうけくそうろうさしうるよ向ま

白浪の浜をうえのよ向まそうろうよ

詞林采葉云万葉集

此よし白まいれの松小島（カリ）さうう苔（コケ）しろくさう。
古今集の物名のさうう同（ヒト）しおれ。又（タ）云（イヘ）女蘿（ヒカヅラ）
そ。つつのごごくく。かくとさうのこと。
万葉紅葉（モミヂ）ばをよ白まい非（ヒ）女蘿（ヒカヅラ）ばかれ（カレ）ずて
こと也（ナリ）ごごく　万古源集云（イヘ）よ白まいれを。
林おをくみも一盛（モリ）のむ曲（マガ）もいれ。松（マツ）ばの事（コト）の
いいもよ白よしこと。　或云（イヘ）よ白まい
必（カナラ）ずまよ寂（サビ）しくも。佛（ホトケ）ばかりのものを
云（イヘ）こと。

◆その蓮の妙経（ミヤウキヤウ）名（ナ）をも手（テ）折（ヲリ）よ
自是以下の須小法花乃文（モン）をおさんとてくくよ。

◆寂寞無人声　法花法師品曰寂寞無人声讀誦此経
典我（ワレ）尒（ソノ）時為（タメ）現（ゲン）清浄光明身（ミ）
◆五逆（ゴギヤク）の達多八天王記（キ）前（ゼン）をかく（カウ）
五逆罪の提婆達多も。妙法乃功力小依（ヨル）く。天王如来
と云（イヘ）記前（キゼン）をかうむりうと云（イヘ）こと。妙蓮の達多ばかり
よ沒（ボツ）を　提婆品曰成等正覚（ジヤウトウシヤウカク）廣度衆生（シユジヤウ）無有（ムウ）数（スウ）
達多（ダツタ）善知識（ゼンチシキ）故（コ）告（ツゲ）諸（モロ）四衆（シユ）提婆達多却（キヤク）後過（ノチスギ）無量（ムリヤウ）劫（コフ）
當得（トク）成佛（ジヤウブツ）号（ガウ）曰（イハク）天王如来（ニヨライ）上下四（シ）
云（イヘ）よ等（トウ）ー　　記前（キゼン）くいかう（カウ）可（カ）く
劫国数量名（ミヤウ）為前（ゼン）よ　華厳疏曰記（ケ）者記成道（ジヤウダウ）事（コト）也授
別（ベチ）よ　釈名曰前種（シユ）稜移（ウツ）蒔之謂（イヘ）よ

八歳の龍女有り南方無垢世界よりきたりて
提婆品曰文殊師利言有娑竭羅龍王女年始八歳
智恵利根善知衆生諸根行業云云 尒時龍女有一
宝珠価直三千大千世界持以上佛佛即受之云云
當時衆會皆見龍女忽然之間変成男子具菩薩行
即往南方無垢世界坐宝蓮華成等正覚三十二相
八十種好普為十方一切衆生演説妙法矣
三大部補注云心得應真故云無垢正順本覚名曰
南方矣
猿右
○さて海の底の玉藻よりてものそを焉と月氏宝
深達罪福相遍照於十方微妙浄法身具相三十二

八十種好用荘厳法身天人所戴仰龍神咸恭敬
提婆品讃佛偈也 深達罪福相遍照於十方微妙
浄法身具相三十二以テ八十種好ヲ用テ荘厳法身ヲ天人
所戴仰龍神咸恭敬 と訓讀をろし 文句云罪
福者約七方便傳作ス今偈深達ヲ無ク無ク罪福ニ入ヲ一實相ヲ名ク
為ス深達ト也十方即チ十方界同ク以テ實恵朗之ヲ故言遍照ト
也云云 微妙浄法身具三十二相者深得法身之理ヲ
即チ備ヘ相好ヲ如大品明欲得一切法ヲ當学般若ヲ如得ル
意珠ヲ也二乗但得空空ヲ無相好也矣 止観曰深達
者圓中ノ如鏡故能遍照名テ為ス深達ト以深達故具ス一切ノ
相ヲ矣 弘決曰智称法身ヲ為ス諸

相本故云法身具三十二矣
三十二相八十種好八文句及科註等よろしく畧之　止觀曰相為大相海好為小相海矣
金光明經疏記曰大相謂三十二相小相謂八十種好皆称海者若大若小悉皆有邊故皆是法界全體顯現故一一々相並非法海矣

天龍八部人與非人皆遙見彼龍女成佛
提婆品曰尒時娑婆世界菩薩声聞天龍八部人及非人皆遙見彼竜女成佛普為時會人天説法心大歓喜悉遥敬礼矣　名義集云八部者一天二龍三夜叉四乾闥婆五阿脩羅六迦樓羅七緊那羅八摩睺羅伽矣　此内乾闥婆阿脩羅緊那羅の三行八春日龍神よ記と

天八名義集云梵語云提婆此云天法華疏云天者天然自然勝楽勝身勝故論云清浄光潔最勝最尊故名為天矣　龍八梵語云那迦此云龍
別行疏云龍有四種一守天宮殿持令不落人間屋上作龍像之二興雲致雨三地龍決江開瀆四伏藏守轉輪王大福人藏矣　八龍八春日竜神よ記と
夜叉八　名義集云梵音也此云勇健亦云暴悪旧云閲叉能飛騰空中行地二在虚空三天夜叉地夜叉矣

迦樓羅ハ梵語也文句云此云金翅翅翮金色雨翅
相去三百三十六万里頸有如意珠以龍為食矣
摩睺羅伽ハ名義集云梵音也亦云摩呼羅伽此云
大腹行什曰是地龍而腹行也下畧
人与非人者　緊那羅云人非人也　什曰緊那羅ハ
梵語秦言人非人似人而頭上有角人見之言人耶
非人耶因以名之矣
天台云諸経人非人者此乃結八部數尒矣
▲毎年八講朝家の勤行
八座くゝ法花八座ゝ法花の法門を講ずる事
と。一日より八日に終る。一日は執柄の人
二座ゝ一座ゝ一座を講じ。くゝ日より始り。八座を
八日より講ずる尒ゝ八講と云
贈餘雑録云延暦十五年法華八講會始二石淵寺勤
操矣
志貴寺の八講ゝ行基和尚の行ひ給ひ初給ひ
より。毎年十月海士人のつとめとして法事ありとぞ
大職冠藤原内大臣鎌足公和列高市郡人。父天児
屋根命二十一代。小徳冠中臣御食子卿。母鏡大徳
冠女大津夫人。名鏡。在胎聲聞外孕十二月。推
古天皇二十二年甲戌八月十五日誕生于時天智
天皇八年己巳十月十六日年五十六而薨葬大和

国十市郡倉橋山多武峯ニ葬ル
称大職冠者天智天皇八年十月遣東宮大海皇子
於内大臣家授大職冠正一位号也 矣
大職冠ハ冠の名也。天智帝の御宇よ。二十六階の冠
を作り。其第一を大織冠と云。織の冠よ緒を縁
よりられたり。其をさう人の貴ハ深紫く。
此ノ冠を賜ふ故よ。大織冠の称号とそ

源藤ハ五十二代嵯峩天皇第十二ノ皇子也母ハ号ス大夫
全子貞観十四年八月廿五日大納言ゟ左大臣ニ任ず。
年五十一。仁和三年ゟ至テ従一位ニ寛平七年八月廿五日ゟ
薨ず。年七十三。御舘を河原院しゟり。俗ク河原ノ
左大臣と申也 拾芥抄云河原院六条坊門南万
里小路東八町ニ 融大臣家後寛平法皇御所本下
四町京極西号東六条院ト矣 愚見抄云河原大臣
六條川原よいふしてさ家たりて此を婚ふをゝくへて
毎月潮三十石ぞうそひつゝく。海底の奥貝等をそ
ろめしゟ。陸奥塩竈の浦をうつゝく海士の姫

ま懐をそゝりてあそぶ。赤六條院と云
おくゝ　伊勢物語集注云日くよ難波より風をこゝ
そこびーこ。巻よより松尾尼崎より十丈町ゑの方よ
東新田と云村のあたりまで
本朝文集云夫河原院者弘仁先朝第十二皇子左
丞相融卿之甲第也相府在世之間窮風流之體擅
遊蕩之美疊山累巖草木比其枝鑿池湛水魚鳥戯
其波調管絃於仙臺散文籍於月殿寛平法帝脱屣
之後遊覧焉勝地再逢主幽境重得時厥後早改蓮
府之号為花界之砌矣
今昔物語云大臣うせ給ひてのち家淪い此第を

給ふ。月夜ゑの對の塗籠をあけく人のあるやうよ
物りく。見さ也給へい。郷の裝束もつる人のそなたゝ筋
みく二間斗過てく畏て居てり。れい誰と四也給へ。家の
うちよい弱也とゝス。融大臣かく四也給へいかゞ
承侍ん院家よ給ふべきよ。ゆをぐうく
人とゝせい。院宣て。我おりてく居さいてそあく
おゝくのよ孫のあよくれさまべて此所よをむなれ
いうよりくいうゝもりそでなのやうよ小侍ふれいゝい
久次やうよせあ　文暑

▲是ハ東國方よりおこする給よそ
▲ふ里も同一ゑの　大恵書曰欲行千里一歩為初歩

老子経曰千里之行始於足下 又辛夷楽小町よ作す

▲六條河原院　拾芥抄云六條東洞風坊。西光徳坊ト云

▲陸奥いにしくいあんしど塩うまの　浦こくあのたるでうも

　哭いたる今集大哥所の者ども陸奥いつくもおかうんぢど塩うまの浦こくあのつるでをろ来。気うも

　こうこうーこさるのかうとこ此うるもい面白うとこ。

　宝あいもこの歩もい歌のるーこふあ。浜。面

　かりこいよのこと業ふるこうこう

▲あの面よ照月るこをかてこきい　此の三井るよ浜す

▲老うさうてもろこうが　支婦依先よ和製よるうをこと

▲汝うれ秋神さむさ浦わの秋のタうる

汝うれ秋汝のうるれ。浦わい万葉に浦回と云。入海のうるく恢のこくるうをいう

○俗称　○浜辺ともの捨れ汐るれうこ人やろうん

長状海藻

▲勅大臣　職員令曰左大臣一人掌統理衆務舉持綱目總判庶事云々　百寮引要抄云左大臣ハ一の上の宣下しうるあり。第一の官下うれい大政官のうらのうるをまく沙汰うる。若ハ文戈うさ人の大臣よ任うるうるこ。中古ふるい僧任そ垂戈垂絶のくるる任うるこ。右大臣にうるとうるあ左大臣よ同ト。又任うる人ふ日るこ。左大臣ふ垂でうる

虫

附いの〳〵も右大臣の約へ〳〵又た大臣のるを附いた
一のよの宣旨をうふもの〳〵

日本紀云孝徳天皇大化元年六月十四日天皇即
位以阿陪倉橋為左大臣又以蘇我山田石川麿為
右大臣矣　伊呂波字類抄云皇極天皇三年甲辰
始置左右大臣又云孝徳天皇御宇被置左右大臣
并内大臣百官八省矣

▲陸奥のふ賀の城かまを外の中より移されし

五条うら舎より城電町へこえて。又五条の下上徳寺の
内より城金砂村へ小社有。こゝ外にもある事なり
昔海の東陸の城〳〵

續後拾遺集云海の東六宮のあるよりて始るふ。奈
うまよ〳〵云ふのさまをつくもうつるを見
へ城かまふのうちそよう〳〵鈴るさまよる奈良ふ〳〵見

城金明神在奥沢宮城郡千賀浦所祭神六座也所
謂太玉命。武甕槌命。経津主命。興玉。太田。猿田彦神
也。社領千四百石　神中抄云姫竈宮城神ハ田村麿
討夷之時立万八千人之兵粮を炊ける竈之故の
おかのやとぞいふ〳〵

都土産云その月〳〵の城
かまの浦よりたてまつれる。神神へやうて城金とて崇奉る
旧事本紀云神武天皇二年春二月長髄彦神為二天
孫尊一被襲而棄二大倭国一往於陸奥国一故中国順伏這

長髓彦神、元人神、尸化嶽山祇神、児在陸奥国焼鹽施民后稚櫻宮御代依住吉神催保前韓軍大能撃數百異神韓怨其長高其力強其威嚴其氣猛故俱洲輪神司軍船有功仍為陸奥鎮守今鹽釜神是也

○あやふくもあるく陸奥のよがの上ゆ辺着よろ

▲名よ流まさろ　櫻川の名也。

▲さていあれるは笆ゞ流れいろ　雄ゞ鳴いろ　雄鳴いろ　雄鳴いろ　雄

▲徇て呉ふの面前の氣色うせ給ふといふ事

賈島が詞ぬ〳〵ん

沙弥院のやまひ。今お僧の為ならんと。賈島字浪仙范陽人来洛陽韓愈教為文初為浮屠名無本後去浮屠奉進士累舉不中第文宗時為病蝉詩刺公卿以啖牛肉得疾卒年六十五 新唐書

▲多ハ富を比中の樹僧ハしく月下の門推も敲も故人のふ今日前の秋をよあり 詩人玉屑云

賈嶋初赴舉在京師一日於驢上得句云鳥宿池邊樹僧敲月下門始欲着推字又欲着敲字煉之未定遂於驢上吟哦時々引手作推敲之勢時韓退之吏部権京兆嶋不覚衝至第三節左右擁至尹前嶋具對所得詩句云韓立馬良久謂嶋曰作敲字佳矣遂與並轡而歸 矣

ケ様の行も皆沙弥院のよりそて。今日おの秋乃景気そとゝ

▲雲の色の落うれ 雲の色の落うれ 秋雲の色うるのなりそさい勢色ゆよ沙弥

▲洪水の天皇の御ゆうよ 帝王編年記云五十二代嵯峨天皇諱神野桓武天皇第二皇子母同平城延暦五年丙寅九月七日誕生大同元年丙戌五月十九

日立太子 年廿一 同四年巳丗四月一日受禅 同十三
日戊子即位大極殿御年 廿九四 御宇十四年都平安
宮 云云 承和九年壬戌七月十九日崩 御年五十九 兵
▲眺望（テウバウ） そらうよ 詠うたふ。記 月令曰可以居高明可以
遠眺望 兵 日本紀云登高岳遥眺望大海（タカヲカニノボリトホクミワタス） 兵
▲あて 難波のこゝの浦うらも日毎（ヒゴト）よ 湖（ウミ）を汐（シホ）せ
難波のこゝとは。難波津。呂を三津と云。
皆名所也 兵津は住吉の松原を指そ 安ほの浦の月を見る
〔住吉の松原 新後撰集
る津は大坂 天王寺のあたりなるべし 新後撰集
「あて よろづる津の 玉の河 なみ難波のみかさもん

難波津は大坂の小乃中 海のかたち。古今集仮名序
難波なる長柄の橋もつくるとあり。新拾遺よ難波と
距陽（ヘダツ）地とをつゝ合せよう。又 続拾遺よ難波潟田蓑
の島こぎ出けん。此次よりよく。天王寺のあたりよ小の
方中海までを難波と成へし。 又云御津 北云。
仁徳天皇の御ある本の津なれい御津とそ。伊勢物
語よ難波津を今朝こそこゝの浦毎ともあるいあり。
又古今よりてる日の難波のこゝの浦毎ともあり 此
方も有べし。三津。御津。水手（カコ）の三役あり 又云万葉よ
大伴（オホトモ）の三津とよめるへ松原とよめるへ。拾遺よ三津の浜邊と
もむい近江坂本ふあり。おそらく御三津の小浦とこゝ園邑。

已上伊物集注　古今采雅抄云

いづこと云ふ事なし

朴津に往き、新羅村まで

未木

「ここのふたつの石のありてその間

潮四声字苑曰海水朝夕来去波涌也　兎　抱朴子曰

天河与地河海水相搏撃五水相盪激涌而成潮　兎

周處風土記云海神上朝於天鯨鯨迎送海神出入

於穴令水進退為潮　兎

▲案ずるに、本朝事始云昔者筑前国建賀

郡有能鄂斯人始焼塩　兎　旧事本紀云長髄彦神在

陸奥国焼塩施民　兎　景行天皇紀云

本草曰諸州煮海水作塩之謂之海塩天生曰鹵人造

曰鹽黄帝臣宿沙氏初煮海水為鹽其法海辺堀坑

上布竹木覆以蓬茅積汲于上淋潮汐衝汲鹵鹹淋

于坑中水退則以火炬照之鹵氣衝火皆滅因取海

鹵貯盤中煎之頃刻而就其煮塩之器漢謂之牢盆

今或鼓鐵為之南海人編竹為之上下周以蜜灰横

大深尺平底寘于竈背謂之塩盤　兎　又曰戎塩生土

中傘子塩生于井石塩生于石木塩生于樹蓬塩生

于草又光明塩今階州出一種石塩生山石中不由

煎錬自然成塩色甚明瑩彼人甚貴之云即光明塩

也　兎

▲哀なさで愛なえ引一語うまのうさびしさも見て悲うる
古今集哀傷部費之詞云の歌のたのおおひなう
ちさうの男なうて悔。彼あよまうりて有うよ。語
うなと云処のさまを作りうるをうまくし
今昔物語女に云今ハ昔ノ事ニ而ハ有ひりう
ま矣さを治ひられいまむ人もるくあまうるを。紀
費之土佐日記のかりて引るふ。哀さまるの
よみうるとうく 竟意恵秋云春ままでといふ意もーな
さてこうくさびしといふ悲ーうくめづーうく
かなしるて云うくとい引きうく。人の内乃さひしきふ
語うまの浦をまうるうく 某雅朴云春る成て嫌悪

ふうい語うまの浦さひしくと悲うるうくと此おれと
のお文字お和漢旅集ニ春よ春るくてうき

▲貫之い 帳通よ治そ。老の波いる砂よ治て

▲かひも渚（ナギサ）の浦ふ多

上中納言（カミノ）ゆきひら人。
栄（ス）まのかりの。うの奥をうざりておうんて去治ふ時。のをさ
すふ落くくあさうそのかへをりの。枝奥を見
んとてくをひろげ治ふふつてくのかくをふうり
治うり。それをえ治ひてあるかひるのつさやのなまひ
しまり。やよなうまつてお坂の実のうるよ 争をうる

▲吉羽山まふまつてお坂の実のうるよ 争をうる

右今集亦一在承元方分。業雅扶云ゆふ人をまつ
里つゝおぐら多をかくとゝ。春羽山おもてまでくといへん
おもへゝ。戀のこゝろよめるこゝろおいまるゝゝ
右今案扶云朱雀院御時延喜二年四月一日春宮
のおの方の分今まあり分ゝゝ

▲齊明山。おなの里。哥の中山清国寺ハ田村ノ里ニ。今越ハ清水寺
▲さゝ浪河ハ志賀の枕ことゝ。紀ニもまゝ稱ゝ
おもふもまゝ稱ゝ扶云つけゝるハ和泉武部の方ゝ
ゝそゝり。清ゝ浪ゝをハ業雅扶云ゝゝ。速の
里ゝゝ。他ゝ家のゝゝさゝ。おゝゝゝ。
古今ゝ。家物ゝゝ

らんとよめるハゝぐゝさゝ。又伊物小南ゝゝくせゝと
やまぢゝゝそゝるハゝゝ。ゝゝ稱ゝ教政注ゝ
▲名のみありハ江ゝ。緑ゝの文ハ榊川ゝ記ゝ
▲後の杜　在紀伊那伏見北ニ　神祇拾遺云藤杜ハ舍人
親王ト糸　續日本紀云天平宝字三年六月追尊舍
人親王ヲ称ス崇道盡敬皇帝ト糸　藤森弓兵政所記云
當社者舍人親王之廟也親王ハ者天武帝皇子毋ハ新
田部皇女。舍人其諱也天平七年十一月乙丑親王
薨寿六十歳。葬干山背国深草山麓藤尾即今藤森
也贈太政大臣奉崇道尽敬天皇。天皇疆識清雅達
於神道渉於冊書蒐輯日本紀三十巻又得弓兵神

妙之法其兵法秘而在焉毎歳仲夏端午日騎射走馬甲冑帯刀把弓矢操戈矛祭之矣

▲夕ぎれい跡色の秋風ぞ吹　　源重之

千載集秋上後成卿家にて。東路に云伊勢の歌よめるに。

ゆくへなき秋風ぞ吹　　源重之

ゆくへなき秋風ぞ吹　　源重之

ゆくへなき秋風ぞ吹　　源重之

西北古文書云真竹庄 兵 淀ハ今ハ属紀伊郡ニ
勅撰名所和歌抄云淀川東ハ久世郡西ハ乙訓郡ニ
淀川ハ鴨川・桂河・宇治川・木津川・此ノ七大河淀ノ津
ニテ落ルユヘ淀ト云ヘリ
慈法和尚古今集注云淀ハ水ノ流レヨドミタル
ヲ云ヘリ。川淀トモアリ。
淀川ヲハ桂川・鴨川・宇治川・木津川ノ末ヲ淀ト云ヘリ
ユヘニ淀ト云ヘリ
▲淀めやうてるさの空ハ泊りの川ハ淀の流よ落あひてひとつの波よるる 為忠

（朱）
○ 泊りの川ハ淀の流よ落あひて

▲淀めやうてるさの空ハ泊りの川ハ淀の流よ落あひてひとつの波よるる 為忠

▲天雲や小堀のみをそうつもれハ 小堀よ淀を
▲杜の尾の流ふも見しうら 見ふいふ約束よ淀を

山城国葛野郡松尾神社二座者延喜神祇式曰一
座市杵嶋姫是素戔烏尊御子也一座大山咋神也
此神比叡山日吉社ト為一躰ト 神書抄云加茂玉依
姫取丹塗矢化為神ト松尾明神是也 兵 鎮坐記云
文武天皇大宝元年秦都理始造立神殿ヲ 兵
今所祭七座松尾社宗像社月讀社櫟谷社三宮衣
手社四大神 兵 新後撰
○ 名もちゝ色もうつぬ松尾の秋のちりひぢ来の代のあと 太上天皇

▲ひでもちてる　ひでもちおてるひでもちおてる　元照
潮光押照と云。奏撰式云旭海をあてるてるてる。
茶雅云海の面のさざなみをめさうるをおてるてるといふへさを畧
てるてるてるてるてるてるてるてるてるてるてるてるてるてるてる
よりてるてる新波旭と云。万葉集
仁徳天皇十一年夏四月記よ
いでもかしめ給ふ。此旭
てるてるの面を押出すとてるてるを。おてるや新波
旭といつけてるてるてるてるてるてるてるてるてるてるてるてるてるてる

▲真よ旁てて男をいざ小
亜山恵遠法師の伴へ陶潜明。陸修静の二人語ひて

真よ旁てて遠法師亭ちく禁足を守る二人を送り
おて虎渓をこえり。世俗当真よ旁てるてるあくれ
筆勢よ洛を。又王子敬ぶ故ひ嫉捨よ洛を

▲持や田子の浦　田子を子けてるてる。續日本紀十八よ
駿河国多胡浦演てるてる。浦永てる法皇幸ませの
演色のお名とそろ又越中よ円名を

▲あげまかけの旭衣　一条禅閤の説をあてるてるげい
うげ。かけをうてるてるてるてるてるてるてるてるてるてるてるてるてるてる
韻會曰褰裳渡水由膝以下曰揭矣　糸雅曰浅則
揭揭者揭衣ヲ矣
新後拾
○逢のあづま

▲汲い月をも神もちあその　十六日の海を詠て云
草根　ふかの海やあをるる波の音　今宵満る月の影
▲汲ミ置り　汲のさくる時いかに
衣梁　○雪のふる乃月ふくるし地をひてふる雪遊を記
▲残花若の衣を汚て雪積の衣
残花いろ色の梢に。花の影に。野ていろ梢て云
枝長　竹ほい若の衣を汚て雪積の花かとまかふ
▲月宮殿の白衣の神い　白衣よ
三井寺よ汲て
▲ふ重ねるや雪をめくる次雪の袖　ふ重ねるや雪をめくる次雪の袖
云。雪をめくるをい雪の曲よ廻雪と云ふる。俗
雪をめくるとよ
文選洛神賦曰飄颻(ヒョウヨウ)兮若流風之廻雪矣
○ふるとのふるめるて後小雪をめくる袖の色く
▲さをや桂(カツラ)の枝くよ　沉休(シンキウ)文詩ニ云秋風生(スケイ)桂枝(シヒ)ニ
三井寺よ汲て
▲ふりを花ともちる次もみぢ次ふ。上句い秋く
ふる物哀。桂(カツラ)の宮をまふる
ミ月の桂のふいるとふ。業雅卿云秋い弦月の実
ふる時ふれど月の桂の実いふるとふ。ふりを花の雪
ちる雪をとふ。ふる物哀。古人ふ秋云桂の宮桂川(カツラカハ)のふ
ふるとよ云。心敬ふ大井川の色桂月観ふのふ庄ふく。

野蛭抔云往の宮と城於往川の名ニ今も往宮洗し
ト前ニも寛平法皇中宮の御ト雨もつゝ

▲実ニ名よりの白川の　白川ハ山城名所ニ興ある
ものといふべき実ニも水ハ清きよしを

▲面白ハ　二條ニ浴ス。曲水ハ前ニ出ス

▲そも〳〵月の其中よりぞ初月ハ三日月を云。初月ハ三日月を云

明月といわそ〳〵うの月ハ体世書云月体本黒受日之光。
性理大全十二皇極経世書云月体本黒受日之光。
而白注ニ沈括曰月本無光猶一銀九日耀之乃光之
初生日在其旁故光側而取見絶如鈎日漸遠則距
光稍満大抵如弾丸以粉塗其半側視之則粉處如

鈎對視之則正圓也兵

▲そもいわ曲ハ八月のいそぐさをそれハ甚新よりくさう
三日月ハ月よをし。八月よ對して新をめくるやうに成もか
てく。新もうすきさま。西岫とハ西山の事ニ。倭名抄云陸
詞云岫　山穴似袖兵　又峽の字と同しく
岫の字と同しく

▲そもいく月のある夜ハ星のうをさがことく〳〵
月月ハ大空なれハそのあるうちハ小光の星の新うすきを
古語云朝陽雖不及集殘星光兵

▲青陽の雲乃初よい夜む夕の空ニ使ふの色よふ月の新を毎よ
もかくのごとく

まさしく山の端より三日月のかすかに出るを眉よ尺そうそう
文集云宛轉双蛾遠山色 幸都婆小町よめる哥歟
田村よ淀そ。又三日月をよめり 百勝詩云月送天涯猶去舟奥
指 ○堂の海よ雲の波さら月の舟の梢よこぎ行ふね 人丸

▲又水中の遊魚い洵とうごかぬよふ。雲上の花多ひらの降をおそろく
明太祖高皇帝詩曰誰將王爪指長空萬里山河一様同映水有鈎奥怯鈎嗔山並箭鳥疑弓奥
新撰朗詠集云菅家詩白露如珠月似鈎奥
唐史云李白謁宰府二叛上題云海上鈎鼇客李白相問以何物為鈎線曰以虹霓為絲明月為鈎奥

王褒詩云俯観雲似蓋低望月如弓奥
又菅家文草或八百勝待月よめる
▲一悩もくるこぶ万水ものかるよふ次 一悩八月也月くるこぶ次水の
水昇不昇奥 刊定記曰一月不降百水不昇奥
▲雲とうりゑとうり 巫山神女の有るよし。委くよめる深。
藥草云雨とうり雲とうりてとうり
新勅
○雲とうりゑとうりてふ事空ゑ受るも尽よ落るの体 有家
▲光陰 月月の気を云。古語云光陰箭往其速奥
翰墨全書曰光陰箭往其速奥